

かゝる所の見え夏も冬も
ぬきとらふまじりぬ
乃



近衛家熙

— 風雅の探求



廣智三蔵和尚茶

毗之時追中謁者



近衛家熙

— 風雅の探求 —

目次

3	あいさつ
4	近衛家熙の書業の世界
7	風雅の探求―家熙の美意識の一面を考える
9	図版・解説
45	翻刻
58	出品目録
iv	List of Exhibits
iii	Foreword

凡例

- 一、本図録は、平成十三年七月七日(土)から九月九日(日)までを会期とする展覧会「近衛家熙―風雅の探究」の解説図録である。
- 一、図録の図版及び解説番号は、展示番号と一致する。
- 一、会期中、作品の展示替を行う。
- 一、作品解説に記載するサイズの単位はcmである。作品解説に記載する法量は、特に記さない限りは総寸法で、縦×横(長)とし、単位はcmである。
- 一、本展覧会の企画及び図録執筆は、三の丸尚蔵館学芸室 研究員・太田彩及び同専門員・平林盛得が担当した。
- 一、写真は、当庁嘱託カメラマンの撮影による。また、参考作品については、当庁侍従職、陽明文庫より提供を受けた。

あいさつ

宮廷文化が伝統を重んじながらも衰弱の様相を示しつつあった江戸時代、その十七世紀後期から十八世紀前期にかけて、中御門天皇の摂政など、宮中の要職を務めた文化人に近衛家熙このえいえひろ（一六六七―一七三六）がいます。家熙は、遠く藤原鎌足を祖とし、平安中期にその栄華を誇った藤原道長に代表される藤原北家の流れで、五摂家筆頭の近衛家の第二十一代当主です。近衛家の歴代当主は、宮中官職の最高位に上り、朝議において指導的立場にありました。歴代の文芸に対する積極的な活動の成果は、近衛家伝来の古記録や古典籍など、約二十万点の文化財として陽明文庫に収められています。

こうした中で、家熙は幼い頃より書画に卓抜した才能を示し、長じて学問を好んで博学多識、茶道、華道、香道にも精通して多芸多能であり、当時の宮廷文化の第一人者でした。この家熙の書の優品が、当館所蔵品の中にあります。上代様を学んだ独自の書風による仮名や草書、楷書などによって、和歌や漢籍などを流麗にしたためています。また、明治十一年に近衛家から献上された古筆の名品の中には、その表装や収納の箱、袋などの取り合わせを家熙が手がけたものもあります。本展では、これらに家熙がお抱え絵師とした渡辺始興わたなべしこう（一六八三―一七五五）の屏風作品を加え、家熙の絵画への深い関心の様子も紹介します。

家熙の遺品には落ち着いた美しさ、堂々とした気品があります。書にせよ、絵画にせよ、彼が嗜んだ風雅には、常に探求心が宿っています。この展覧会では、家熙のこうした文化活動の一端を紹介し、その重要性を考えてみたいと思います。

平成十三年七月

宮内庁三の丸尚蔵館

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 出品作品一覧 (第25回 近衛家熙－風雅の探求)

作品番号	作品名	作者名	員数	時代	ページ
1	二十一代集巻頭和歌	近衛家熙	一卷	江戸時代 (17～18世紀)	p. 10-11
2	中古三十六人歌合	近衛家熙	一帖	江戸時代 (17～18世紀)	p. 12
3	新六歌仙并古歌	近衛家熙	一卷	江戸時代 (17～18世紀)	p. 13
4	新六歌仙	近衛家熙	一帖	江戸時代 (17～18世紀)	p. 14
5	十二ヶ月花鳥和歌	近衛家熙	一卷	江戸時代 (17～18世紀)	p. 15
6	子日行幸奉和歌序并庚申夜奉和歌序	近衛家熙	一卷	江戸時代 (17～18世紀)	p. 16
7	近江八景和歌	近衛家熙	一卷	江戸時代 (17～18世紀)	p. 17
8	南都八景和歌	近衛家熙	一卷	江戸時代 (17～18世紀)	p. 18
9	瀟湘八景和歌・十鉢和歌	近衛家熙	一卷	江戸時代 (17～18世紀)	p. 19
10	予楽院摂政筆詩歌	近衛家熙	一卷	江戸時代 (17～18世紀)	p. 20-21
11	和漢朗詠集抜書	近衛家熙	一卷	江戸時代 (17～18世紀)	p. 21-22
12	白楽天尚齒会詩	近衛家熙	一卷	江戸時代 (17～18世紀)	p. 24
13	西東両都賦	近衛家熙	二巻	江戸時代 (17～18世紀)	p. 25-27
14	古文孝経	近衛家熙	一帖	江戸時代 (17～18世紀)	p. 28
15	褚遂良書聖教序	近衛家熙	一卷	江戸時代 (17～18世紀)	p. 29
16	歐陽詢書皇甫君碑	近衛家熙	一帖	江戸時代 (17～18世紀)	p. 30
17	徐浩書不空三蔵碑	近衛家熙	一帖	江戸時代 (17～18世紀)	p. 31
18	「玉泉帖」付属品	小野道風	三点		p. 32
19	「粘葉本和漢朗詠集」付属品	伝藤原行成	三点		p. 33
20	「七徳舞」付属品	伝源俊房	三点		p. 34
21	「平重盛書状」	平重盛	一幅	平安時代 (12世紀)	p. 35
22	「帥大納言経信卿消息」	伝源経信	一幅	平安時代 (11世紀)	p. 36
23	「貫行集断簡」	伝藤原公任	一幅	平安時代(12世紀)	p. 36
24	「藤原為家書状」	藤原為家	一幅	鎌倉時代 (13世紀)	p. 37
25	四季図屏風	渡辺始興筆	六曲一双	江戸時代 (18世紀)	p. 38-40

近衛家熙の書業の世界

近衛家熙は、寛文七年（一六六七）に生まれ、元文元年（一七三〇）七十歳で没した。近衛家は、遠祖をたどれば大化の改新に功績をあげた藤原鎌足で、それから降って平安中期の藤原北家の道長を経て、道長の六代下の忠通に至りその嫡男基実が近衛家、弟兼実が九条家と称することとなる。その後近衛家から鷹司家が、九条家から二条家・一条家がそれぞれ分立し、共に五摂家といわれる最高の家格を保持することとなり、その筆頭に位置した。十七代信尹の時に嗣子がなかったため、後陽成天皇の第四皇子信尋が家を継いだ。この信尋の三代後が家熙で、父は基熙、母は後水尾天皇の第十六皇女常子内親王である。霊元天皇の代延宝元年（一六七三）七歳で出仕し、以来東山天皇の代に内大臣、右大臣、左大臣、関白、中御門天皇の代に摂政、太政大臣、准三宮となり、享保十年（一七二五）出家して、予楽院真覚虚舟と号し、桜町天皇（家熙の外孫）の代に世を去った。号には、ほかに墨如・青々林・吾楽軒・昭々堂・物外楼主人などがある。

近衛家は歴代公家筆頭の家として、皇室の補佐役を勤め、有職故実を継承し、道長の『御堂関白記』を始めとして、家の日記・古文書類から多くの美術品を所持した。家熙は、父基熙の薰陶に生来の資質も備わって、伝統的諸道に優れた才を発揮した。なかでも、書は始め空海の書法を慕って立てた賀茂社の祠官藤木敦直の書流・賀茂流を学んだがこれにこだわらず、自家や他所に伝存する平安朝の名筆を中心に勉強し、お家流全盛のなかにあって、ついに上代様を根幹とした復古和様の書風を立てた。家熙の書の業績を挙げれば『近衛家熙写手鑑』（予楽院臨書手鑑ともいう）がある。総計二二三枚、伝藤原佐理筆の室町切、同無量義経切を始め、最澄筆久隔帖、伝紀貫之筆寸松庵色紙などがあり、すべて原本から模写したもので、しかも家熙自身が編集して一帖としたものである。名筆に着目して手習いに精進した姿をみる事ができる。これ以外にも単独で模写したもの、おなじものを何度も模写しているものも知られている。また、家熙の力量を示すものに『草書六箴屏風』（御物）一対がある（参考作品①）。中御門天皇の勅命

をうけ、家熙が、唐の敬宗に浙西觀察使李徳裕が奉呈した六種の箴言（諫の言葉）を草書に認め屏風仕立としたもの。天皇は家熙の書を褒め、そのお言葉に「かきつくされたるすみつきのはひは、筆の海のふかき底をもさぐりしり、此道にたぐひもあるまじくなむ」とみえ、「名だかきはやまと唐あまたあれどこの水くきのあととはことなる」の御製を賜っている。

家熙筆のものは模写のものも、自筆のものも、共にその多くは近衛家の伝来品を一括収蔵する陽明文庫（京都）に蔵されている。そして他所に存在するものは分散してまじまじとまっているものはない。ところで当館には明治十一年近衛家から皇室に献納された『粘葉本和漢朗詠集』（権跡朗詠）以下二十六件の同家伝世の名品を管理しているが、これとは別に皇室御所蔵の経緯は明瞭ではないが、家熙自筆の書十四件があり、さらに香淳皇后が昭憲皇太后（明治天皇皇后）の御遺物としてうけられたものの中に家熙自筆の書三件（展示2・4・11）がある。これら計十七件をもとに家熙の書業の世界をみることにしよう。

仮名書は多様な散らし書があり、漢字には楷書・行書・草書の各種の字体がみられる。料紙も素紙のほか、数種の染紙に打曇を配したり、金泥の霞や、黄土色の竜欄文を型押しし、同色の霞を描いたもの、唐紙（和製）など様々である。

一、仮名書（散らし書を含む）

二十一代集巻頭和歌（展示1）、中古三十六人歌合（展示2）、新六歌仙并古歌（展示3）、新六歌仙（展示4）、十二ヶ月花鳥和歌（展示5）はいずれも古典作品の抜き書を題材とした様々な散らし書で、なかでも十二ヶ月花鳥和歌は上部に竜欄文の型押しや、一面に霞を描いた模様が見られる。子日

行幸奉和歌序并庚申夜奉和歌序(展示6)は子日の遊びと庚申夜の歌会という王朝年中行事の二篇の全文を写したもので、二種の染紙に素紙を加えた地紙に打疊を加えた技巧的な料紙を使用している。近江八景(展示7)、南都八景(展示8)、蕭湘八景(展示9)は三種の名所八景和歌、室町期から江戸期にかけて詩歌とともに名勝地の絵画が描かれるものが多く残るが、ここには絵はない。たゞし、近江八景・南都八景は料紙に色変わりの染紙を用い、紙背に流水に花筏の雲母絵を描いた同じ体裁のものである。蕭湘八景和歌は後ろに十躰和歌を加え、前二者と違って素紙を用い、全巻散らし書としている。

二、漢字 行書・草書

予楽院撰政筆詩歌(展示10)は、蕭湘八景詩二種を行書と草書に書き分け、その後新撰朗詠集中の漢詩(草書)と和歌を加えている。料紙は(展示6)と同じ技巧で、色変わりの染紙(展示6より種類は多い)に、特に表ばかりではなく、文字面ではない裏面にまで打疊を配すという、他に例をみない手の混んだものとなっている。和漢朗詠集拔書(展示11)は新撰朗詠集と同

じで、漢詩(草書)と和歌を書いたものであるが、料紙については唐紙(和製)であるのが珍しい。白樂天尚齒會詩(展示12)は中国に於ける敬老の祝宴会の嚆矢であり、わが国にも影響を及ぼした白居易(号樂天)の尚齒會の詩文、西東両都賦(展示13)は同じくわが国王朝貴族の必須の教養書となっている文選中にある。両者とも遅滞のない、しつかりとした草書である。展示10は展示中唯一の絹本の両巻であり、上下に金の界線を引き、欄外に金泥の霞を描いている。

三、漢字 楷書

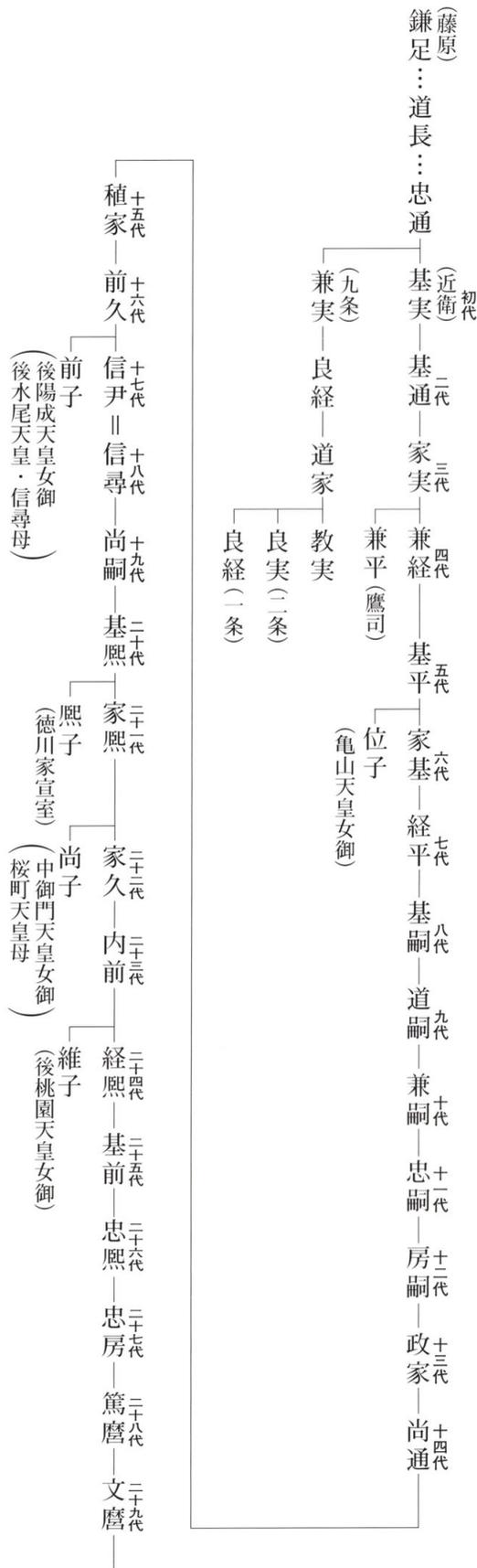
古文孝経(展示14)は文選などと並んで中国の古典で、わが国に於いても貴族の読書始めに使用されるもので、家熙も当然使用したものと思われる。折本仕立てにした、謹直な楷書である。展示15から17の三件は金石文に基づくものであるが、原拓本によるものではなく、その転写本類によったものである。褚遂良書聖教序(展示15)は玄奘三蔵の偉業を讃えた唐の太宗の文を当代の能筆家褚遂良(五九六〜六五八)が揮毫したもので、太宗の文の他に皇太子高宗の文もあるが、家熙の模写はない。料紙は素紙に碁盤目

の罪を引く。卷子仕立一卷。歐陽詢書皇甫君碑(展示16)、歐陽詢(五五七〜六四一)は始め隋朝煬帝に仕えたが、隋朝亡国の後唐の太宗にその書を愛され用いられた。褚遂良らと初唐の四大家に数えられている。碑は隋朝の忠臣皇甫誕の顕彰碑で、建碑は唐の貞觀十一年(六三七)頃と考えられている。折帖仕立一帖。徐浩書不空三藏碑(展示17)は、真言宗付法第六祖のインド僧不空三藏の業績を讀えた碑文、徐浩(七〇三〜七八二)は玄宗以下四帝の親任を得た能書家で、撰文は建中二年(七八一)である。折帖仕立一帖。

平林盛得(ひらばやしもりとく/当館学芸室専門員)

参考図書
 村上翠亭・高城竹苞共著 近衛家熙写手鑑の研究
 名和 修 近衛家熙・近衛家 国史大辞典他

近衛家略系図



風雅の探求——家熙の美意識の一側面を考える

平安時代の末、関白藤原忠通の嫡男基実(一一四三〜一六六)を初祖とする近衛家の長い歴史の中で、江戸時代に入って、まずは後陽成天皇の第四皇子で、第十八代当主となった信尋(一五九九〜一六四九)が、後水尾天皇を中心とした学問芸術の一大隆盛期―寛永文化の一翼を担った人物であり、宮中の要職を務めると同時に、その文化の発展、存続に大いに寄与する存在であった。その孫にあたる第二十代当主基熙(一六四八〜一七二二)は、後水尾天皇の庇護養育を受けることとなり、諸芸に秀で、また後西天皇より古今伝授を受けた。こうした恵まれた資質を受け継いだのが、第二十一代当主の家熙であった。

家熙については、すでに、学究的資質に優れたうえ、小野道風らの古筆から学んだ上代様を基とした独自の書風で一流を成し、また宗和流の一大茶人であり、さらに華道や香道にも精通し、和歌や画も能くするなど、実に多芸多能な人物であったと評価されている。今回の展覧会では、こうした人物像を当館所蔵の家熙の書作品を通して紹介すると同時に、彼の高い資質、素養に培われた気品ある美意識にも注目した。家熙が関わったと考えられる古筆の表装や仕立て、家熙が認めた絵師である渡辺始興の作品を加えて、家熙の弛まない風雅への探求心に触れてみたいと考えている。

ところで、明治十一年(一八七八)に近衛家第二十六代の忠熙より献上された品々は、小野道風「玉泉帖」など、当館で収蔵する二十件余の作品と、御物として東山御文庫に収められる伝嵯峨天皇「李嶠雜詠」、宇多天皇「周易抄」の二件を合わせ、いずれも古筆の名品として名高い。これらの作品が収納されている箱などや、本紙を引き立て保護している表装は、家熙の時代に手がけられたものが少なくないと言われている。そこで史料と現存作品を比較しながら、この点について考察してみよう。

史料として取り上げるのは、家熙の侍医であった山科道安が、家熙に伺候して聞き及んだ内容を書き留めた『槐記』で、家熙の学芸に関する事柄が豊富に記載されている。これは、享保九年(一七二四)正月から同二十年正月まで、つまり家熙五十六歳からの十一年間余の記事で、茶会記が多いため、そこに用いられた掛軸の記載が多々ある。掛軸の内容、表装(具)の様子を詳細に記述したのもあり、現存作品との比較も興味深い。

享保十年十二月五日の茶会記に登場する「御掛物」は、「西行の文、此は近衛家にて、名高き一軸なり、…昔三逸(藐)院(十七代信尹、一五六五〜一六一四)の御時は御裳川の茶とて、毎度ありしなり、…表具は、おりべ(織部)へ仰付けられて、一文字青地の金紗、中白地の金紗、上下紺地のしけ(絁)なり」とある。この軸は、本紙の内容から当館所蔵の「西行仮名消息」にあたるようで、実際の当該作品の表装は、一文字と風袋は緑地花枝文金紗、中廻しは白茶地花枝文金紗、上下は縹地平絁であり、記事の内容と一致するものと考えられる。この表具は織部に仰せ付けられたものと記載されている点に注目しておきたい。

享保十三年四月二十九日には、「雅経の色紙」が登場する。小振りな色紙で、波に楓の下絵が裝飾され、和歌が一致することから、当館所蔵の作品であることは明確である。この「御表具」は、「一文字、白地の金欄、中からぬい(唐繡)、上下金入のどんす(緞子)、後西院より拝領の由仰なり、御表具とも、後西院の御物すき也」と記載される。実際の表装は、台表具形式の台にあたる部分に白地三本縹緞、一文字に白地鶴丸唐草文金欄、中廻しは花鳥文様の繡裂、上下は葡萄唐草文の緞子である。この表具は、後西天皇のお好みであると記載される。また同年十一月十三日の記事には、「掛物、定家の懐紙の下書、是は後水尾院の御物にて、宗和の表具也、一文字茶地きんしゃ、中こんぢのきんしゃ、上下白地のきん入どんす」とある。この軸にあたりと考えられるのが当館所蔵の藤原定家「反古懐紙」で、表装は一文字と風袋が茶地龍文金紗、中廻しが濃紺地花唐草文金紗、上下には白地四つ目亀甲繫文の緞子が用いられている。

これら近衛家が所蔵していた古筆の名品の表装に関わる記事において、「西行仮名消息」は古田織部(一五四四〜一六一五)、「雅経色紙」は後西天皇(一六三七〜一六八五)、定家「反古懐紙」では金森宗和(一五八四〜一六五六)の好みの表装であることがわかる。この他にも陽明文庫蔵の藤原定家「和歌詠草(泊瀬山)」「享保九年十一月六日」など、現存作品と確認出来るものもあるが、それ以外にも、表装についての興味深い記事がある。

例えば、享保十一年四月二十一日「定家の文」の表装は「一文字風袋、紫地印金、中蜀江、上下、縫紗」と記述される。また享保十四年五月四日「御掛物、東山義政、御先祖の御方へ、参りたる文なり」の表装は、「一文字紺地金欄、中

フランダ、上下蜀江錦」とある。これらの表装に見られる印金、蜀江錦（蜀江文の繡珍か）、縫紗、金欄、そしてオランダと記述されるのは現存遺品からはモール織かと考えられるが、これらは当館所蔵の近衛家献上の古筆の名品や、陽明文庫所蔵の掛幅に多く用いられている。

また、当館所蔵の藤原定家「記文章案」の内箱身底には、基熙によって「延宝九年（一六八一）春に思いがけず本品を得、表具は実に素晴らしく、末代までの家宝として秘蔵すべきもの也」と記される。現状の表装は、一文字が紫地牡丹唐草文印金、中廻しは黄地牡丹唐草文金欄、上下が緑地雷くずし文に桃枝文を金箔糸で表した裂地を用いている。この作品については、基熙の箱書が内箱の蓋裏と身底にはめ込まれている点などから、収納箱がおそらくは江戸後期頃以降に替わっていると考えられ、表装裂についても、一文字の印金は掛風袋と同様の裂で、江戸以前の古裂を用いたのではないかと考えられる継ぎ合わせがあるが、中廻しと上下は江戸中期以降ではないかと考えられ、基熙が内箱身底の墨書を記した時点の表装ではない可能性がある。とはいえ、家熙がこの作品を扱った時点では、基熙が素晴らしいと誉めた表装であったはずである。

さて、ここまでの記述においては、古筆の名品の表装は、すでに家熙の時代までに成立していたものが少なくなかったことを示唆している。その一方で、当館所蔵の「粘葉本和漢朗詠集」（展示No.19）は、基熙から家熙宛ての書状から、家熙の時代に蒐集されたものとわかる。この作品を収納する内箱は、品の良い鶴丸文蒔絵の漆箱で、その箱を収納する袋が付属している。その袋は、白茶地蜀江形段織文繡珍で、陽明文庫所蔵の「中御門天皇 和歌懷紙」の中廻しと同じ裂である。この類の裂が、先に紹介した「槐記」に記される蜀江あるいは蜀江錦であろうし、陽明文庫所蔵品の宸筆などに用いられている例が少なくない。また、表装ではないが、陽明文庫所蔵の「後西天皇勅作茶杓」を納める紺茶地紋入り小石畳文経緯と同様の裂が、当館所蔵の「七徳舞」（展示No.20）を納める蒔絵漆箱の収納袋に用いられており、家熙の時の仕立てではないかと考えられる。これらの蒔絵漆箱には特に作者の銘などがなく、いずれも細工や技法が巧く、十七世紀後半から十八世紀前期頃の作品とほぼ考えられる点も、近世漆工史を考える上で注目すべきであろう。

このように見てくると、近衛家が所蔵していた作品の表装は、一概に家熙ばかりの好みによるものとは言えないが、優美で上品な茶風として宮中や公家の上流階級に大きく影響を与えた金森宗和との交流が深かった後水尾天皇、後西天皇、信尋、そして基熙によって育つてきた十分な環境の元で育つた家熙が、様々な分野に博学多識、多芸多能な才能を發揮したのと同じように、表装や箱

などに、独自の好みを反映した仕立てを完成しているとも言えるであろう。

さて、家熙の多芸多能さを示し、探求意欲を欠かさなかった成果の一つに、家熙自ら描いた「花木真写」図巻（三巻、陽明文庫蔵、参考作品⑤）がある。専門絵師にも劣らぬ優れたこの写生画は、かねてより高く評価されている。このような才能をも持っていた家熙が自ら書した多くの書作品も、様々な仮名の散らしを試み、行書や草書ではその巧みな筆遣いを自在に楽しみ、様々な装飾した料紙を用いて、美しい表紙や見返しを付して完成させている。表装などの仕立てにしても、家熙自身の書にしても、自らの美的感覚で風流を楽しんでいるようである。改めて、その才能の豊かさに驚くばかりである。

最後に家熙のお抱え絵師として仕えた渡辺始興について若干触れておこう。残念ながら、当館には家熙と始興が共に関わった作品はないが、始興の作品「四季図屏風」（展示No.25）を紹介している。詳細は作品解説を参照されたいが、内裏の建物内で使用する為に制作された屏風であり、家熙に仕えることで始興が掴んだ絵師としての大仕事であったと考えられる。

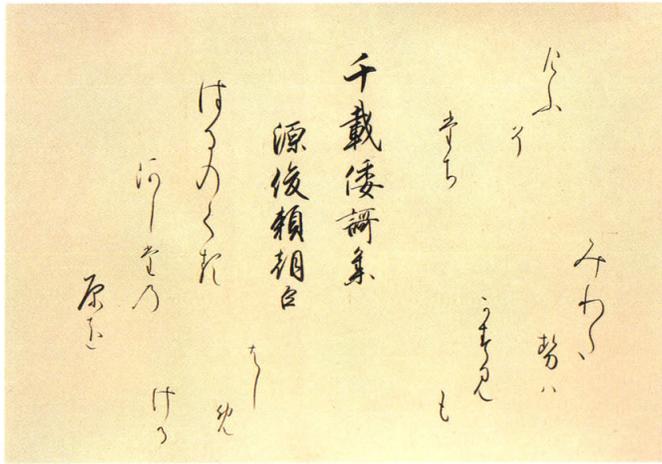
始興は、昨春秋に展覧会で取り上げられて再評価され（大和文華館「渡辺始興—京雅の復興—」、注目を浴びている。その始興の作品の中で、当館収蔵品と関連のある興味深い作品が、「春日権現験記絵巻 二十巻」の模写（参考作品⑥）である。「春日権現験記絵巻 二十巻」の模写（参考作品⑥）である。「春日権現験記絵巻」は、鎌倉時代、延慶二年（一三〇九）に春日社に奉納、西園寺公衡の発願、絵は宮廷預所の高階隆兼、詞書は前関白鷹司基忠らと、制作事情が明確な作品で、古くより名品として知られ、天皇らの貴顕が懇願して拝観の機会を得る以外は、春日社の宝庫に秘蔵されていた。この絵巻を家熙が詞書を、始興が絵を担当し、三年間かけて模写され、享保二十年に表具が出来上がったことが『近衛家雑事日記』より知られている。この絵巻の他にも「八幡太郎絵詞」（東京国立博物館蔵）などの古絵巻の模写を行い、また家熙と同様、写生を重視していたことが「鳥類真写図巻」からも窺え、模写、写生といった仕事が、彼の作品にどのように影響を及ぼしているのか、興味深い点であり、今後の一つの研究課題でもある。

いずれにしても、家熙がとりたてた渡辺始興という画家は、家熙のもと、恵まれた環境の中で大きく成長したであろうことは疑いない。その始興が制作した内裏で使用する「四季図屏風」には、その画題の取り合わせ、描法の取り合わせ、構図など、装飾性豊かな点に、家熙の風雅への弛まない探求心の影響があるように考えるのは、行き過ぎであろうか。

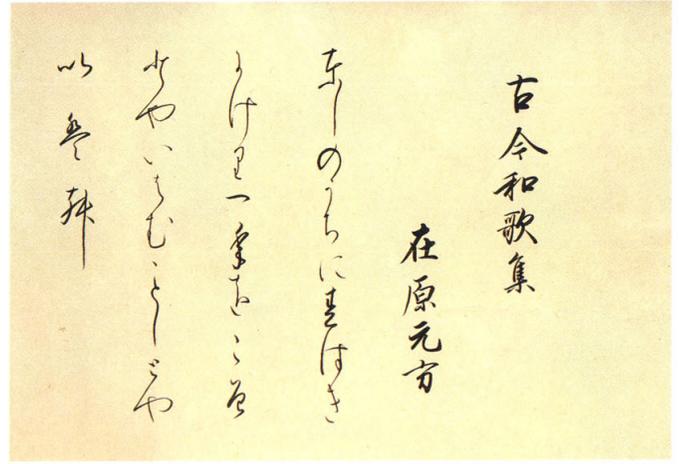
太田 彩（おた あや／当館学芸室研究員）

図版・解説

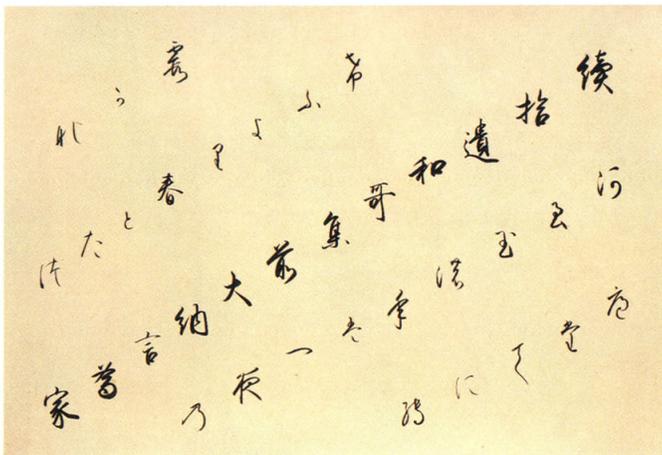




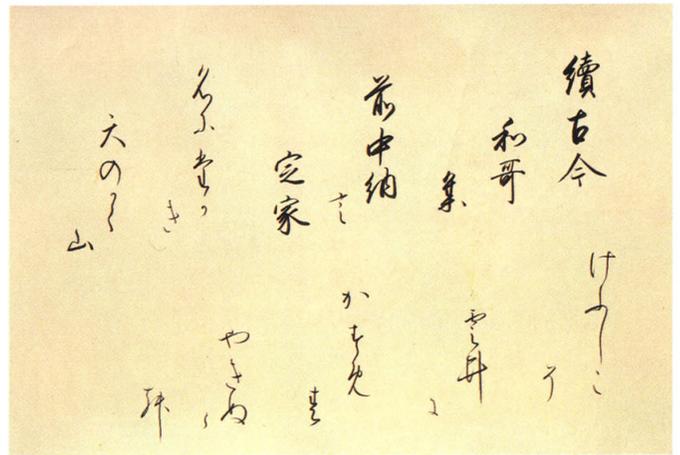
7. 千載和歌集 源俊頼



1. 古今和歌集 在原元方



12. 続拾遺和歌集 藤原為家



11. 続古今和歌集 藤原定家

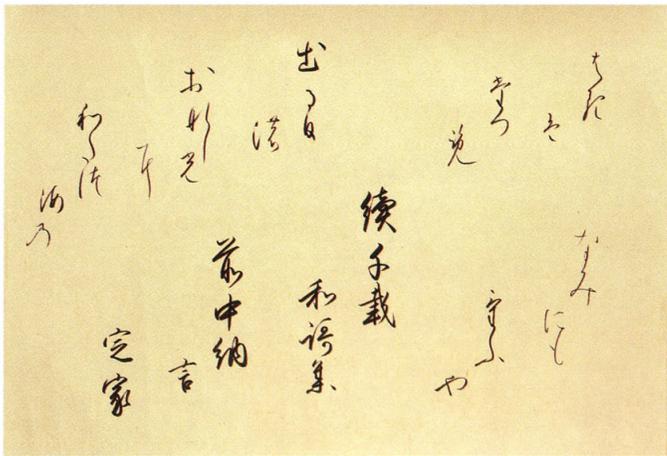
一、仮名書(含、散らし書)

1 二十一代集巻頭和歌 一巻

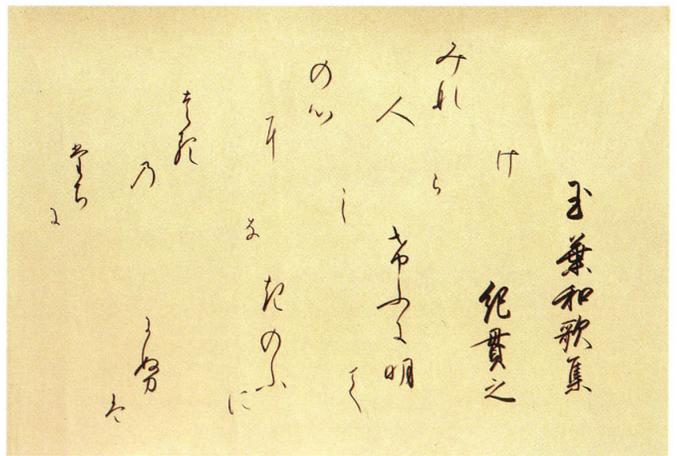
総三三・〇×一〇七三・〇

勅撰和歌集の各巻頭の第一首を抜き出して、仮名の散らし書で表したものである。

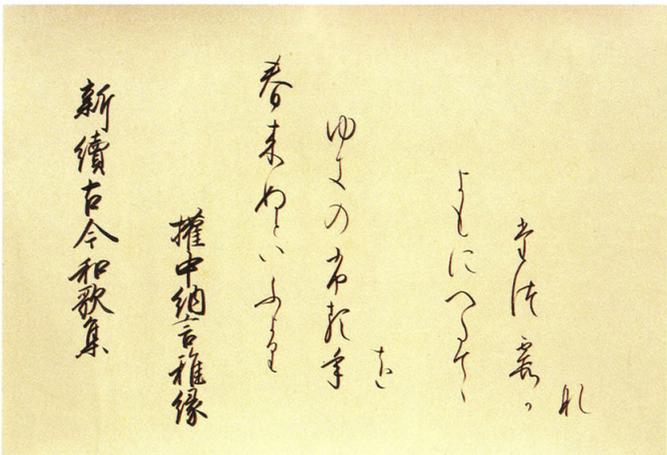
勅撰集は、天皇(勅)または上皇(院宣)の命によって選ばれた集で、漢詩文集と和歌集がある。勅撰漢詩集に続いて作られた勅撰和歌集は、平安時代前期の醍醐天皇の勅命によって延喜五年(九〇五)に撰ばれた『古今和歌集』を最初として、室町時代後期、後花園天皇の永享十一年(一四三九)に完成した『新続古今和歌集』まで、合計二十一代の集がある。和歌はわが国古来の歌謡から発生したもので、良く人々の嗜好にかなう、文化の中心にあったから、歴代天皇は率先その習得に努められた。勅撰和歌集は人々の関心の的であり、とりわけ巻頭第一首はその集の象徴歌として注目された。家熙はこの二十一首をもとに様々な散らし書きを試みている。



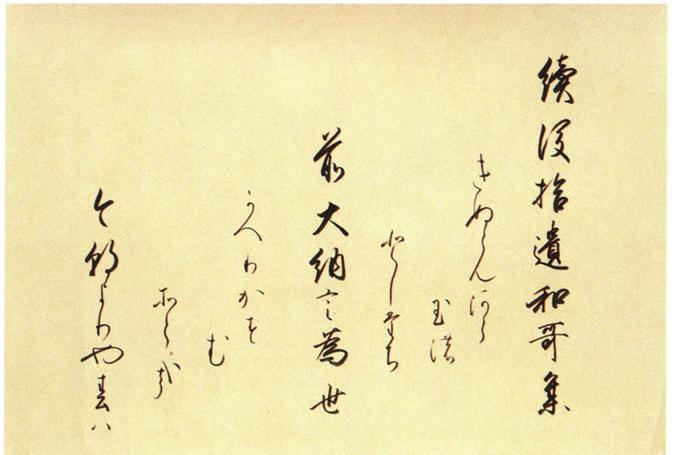
15. 続千載和歌集 藤原定家



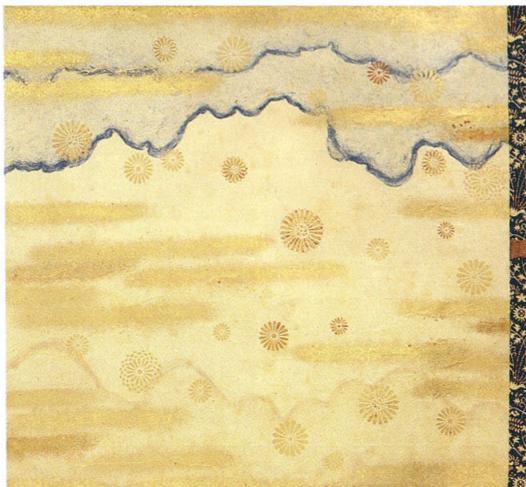
14. 玉葉和歌集 紀貫之



21. 新続古今和歌集 飛鳥井雅縁



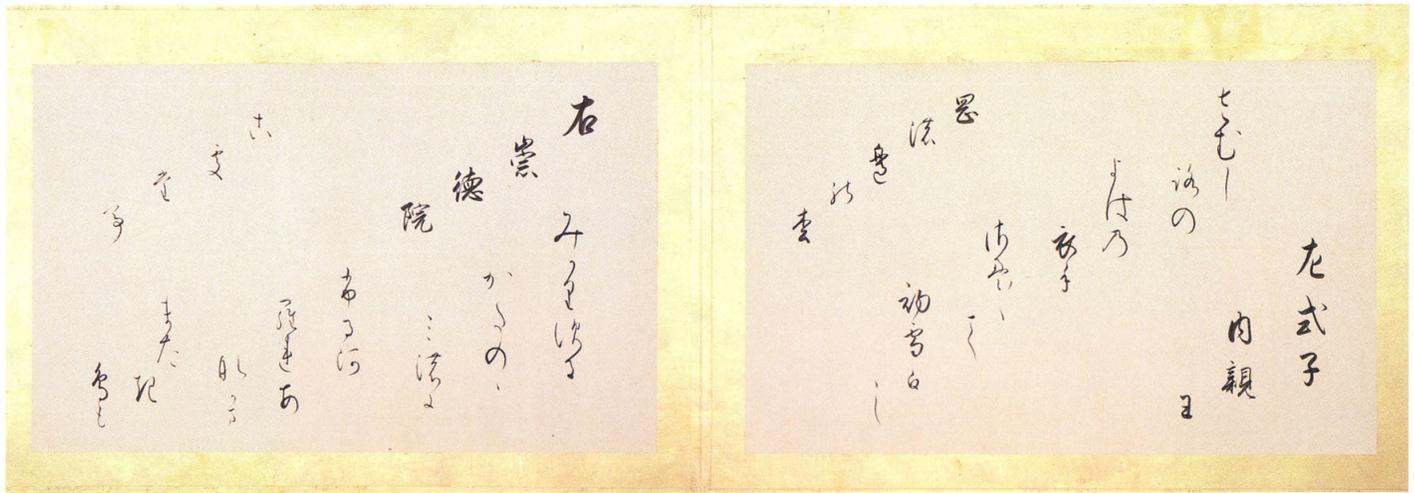
16. 続後拾遺和歌集 藤原為世



見返し

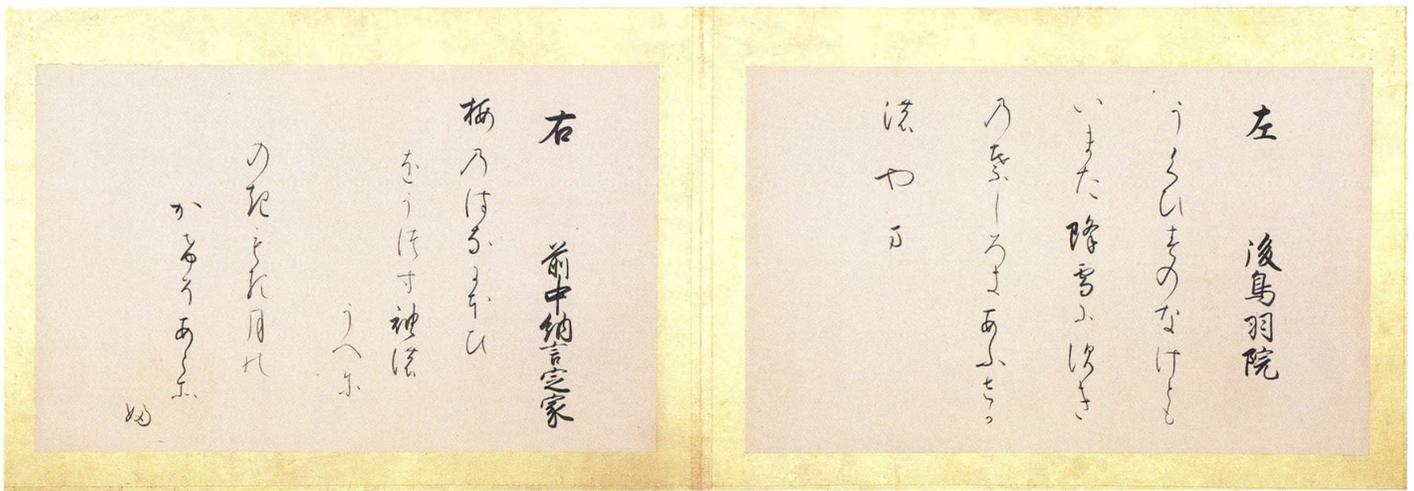


表紙



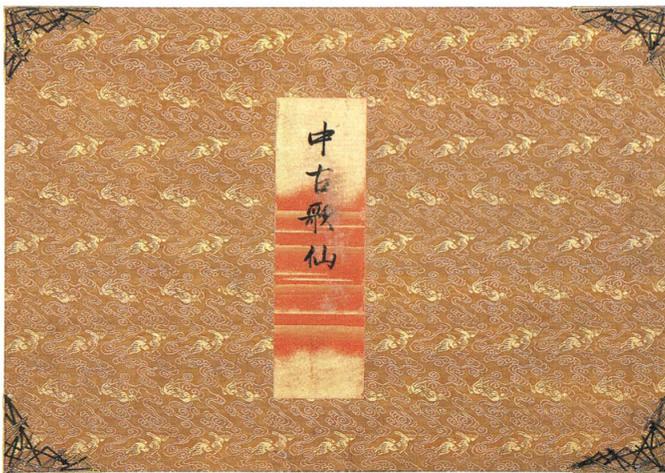
崇徳院

式子内親王



藤原定家

後鳥羽院

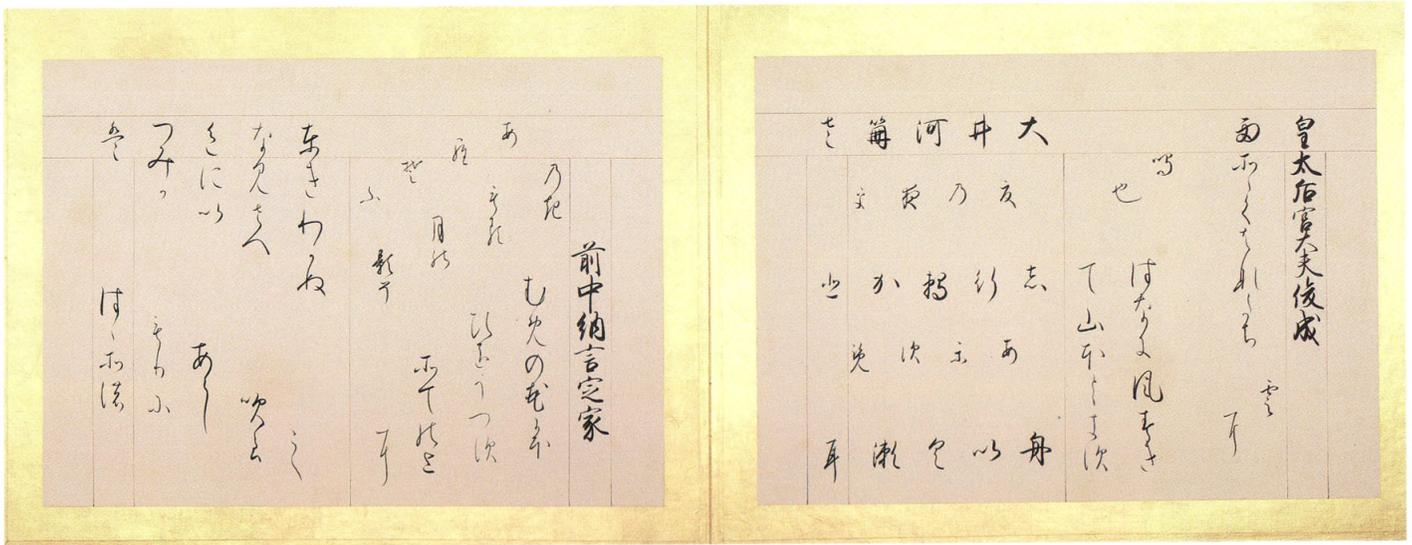


表紙

2 中古三十六人歌合 一帖

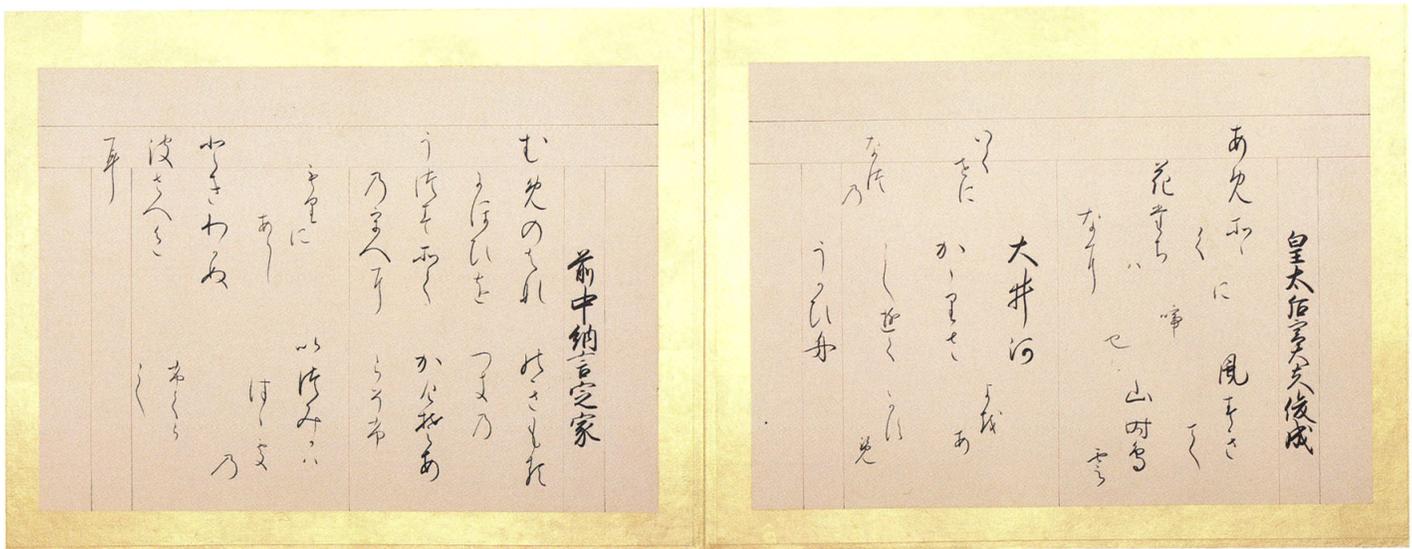
総三六・八×五二・四 本紙二八・五×四五・八

書名を中古歌仙とし、折帖で金紙の台紙に懐紙一紙に和歌一首を散らし書し、作者の上に各々左・右とあり、つがいの番数はないが歌合形式をとっている。本書の表は十八紙、第一紙は左後久我太政大臣(あけぼのや)、第二紙は右從二位家隆(露しぐれ)、第一七紙は左前大納言兼宗(世をすつる)、末の第一八紙は右藤原清輔(としへたる)、裏面も十八紙、裏第一紙は左後鳥羽院(うぐひすの)、裏第二紙は右前中納言定家(梅のはな)、裏第一七紙は左皇太后大夫俊成女(あくがれて)、末の裏第一八紙は右西行法師(きりぎりす)である。出典歌はすべて『新古今和歌集』にある。表と裏を返すと表第一番左が後鳥羽院、最末の裏第十八番右藤原清輔となつて、中古三十六人歌合と一致する。したがって中古歌仙とするが、中古三十六人歌合である。表紙は金茶地に金糸の番いの鳥と流水(又は雲カ)文の綴りで、四隅は松葉の金具の留め具とする。短冊形の題紙に中古歌仙とある。昭憲皇太后の御遺物を受けられた香淳皇后の御愛用のもの。



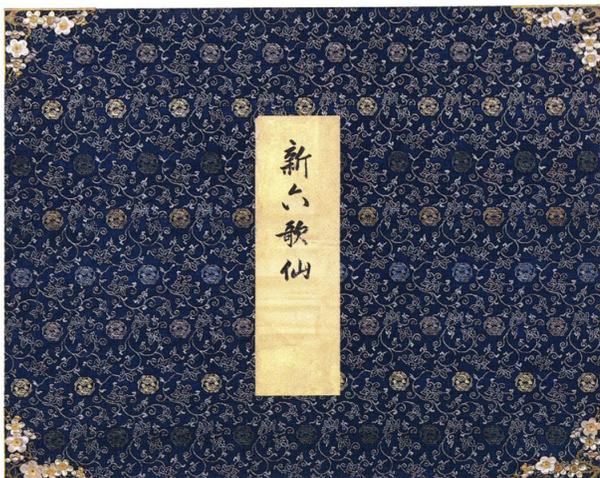
藤原定家

藤原俊成



藤原定家

藤原俊成



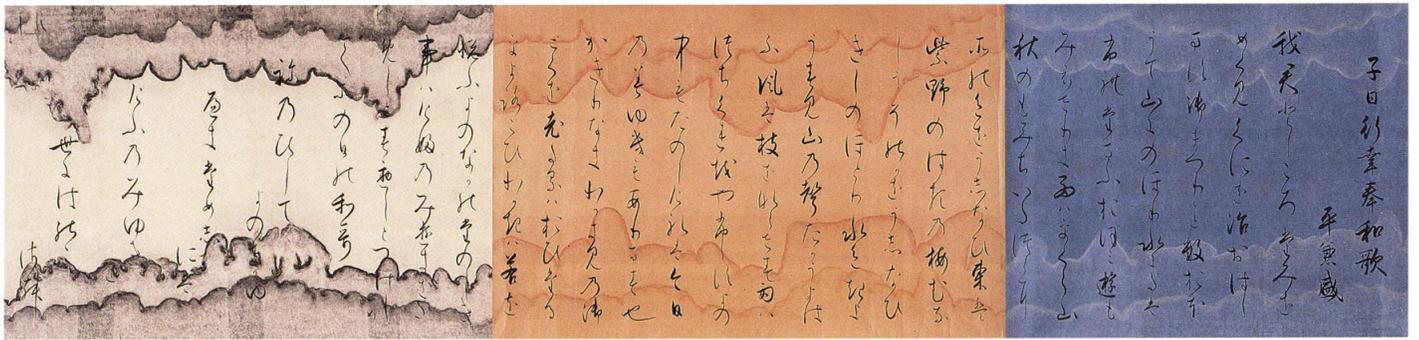
表紙

4 新六歌仙 一帖

総四〇・〇×五〇・八
本紙三二・八×四四・〇

上方に二本の界線、二本目の界線の中央から一本、右辺寄りと左辺寄り各二本の界線を引いた料紙を用い、一人二首の和歌を一紙に散らし書にしたものを、金紙の台紙の表裏に貼って帖仕立にしている。新六歌仙の和歌で表裏は同じ和歌であるが散らし書は同じではない。

表紙は紺地に金糸の花唐草文の綴子で、四隅は螺鈿の梅花に金具の枝を留め具とする。短冊形の題紙に新六歌仙とある。昭憲皇太后の御遺物を受けられた香淳皇后の御愛用のもの。



巻首



見返し



表紙

6 子日行幸奉和歌序并庚申夜奉和歌序

一卷

総一九・三×二二九一・九

王朝の年中行事にかかわる二篇の和歌序を、打曇を施した染紙という技巧的な料紙に写したもの。打曇は白・紫・黒、染紙は縹・黄で素紙もある。家熙の古典学習の一端を示すものであろう。

前篇『子日行幸奉和歌序』は、永観三年(九八五)二月十三日、円融上皇が京の北郊紫野で子日御遊を行われたさい、随従した平兼盛が歌会の題の選定と序の作成を命ぜられ、提出した序とそれに添えた和歌一首である。子日の遊びは春、多くは正月の子日に野原に若菜や小松を摘み、歌会や管絃の催しを行い、健康を祝った行事である。序の文意は、「円融上皇は治世中には激務のためこのような遊びを催されなかつたが、そのお陰により今日の平安があるわけで、限り無い君の御徳を老いも若かきも喜んでゐる。世の中の楽しいこととは今日の御幸のような楽しみで、これを後世への例とすべしとおおせください。」と言うものである。本序は『兼盛集』の冒頭に収められている。

後篇『庚申夜奉和歌序』は、貞元元年(九七六)十月二十七日、伊勢の斎宮親子内親王が野宮の御殿で庚申の遊びをされたとき、斎宮の命により源順が作成した歌会の序とそれに添えた和歌一首である。庚申の遊びは中国道教の影響と考えられるが、庚申の日は夜通し起きると言う風習で、詩歌、管絃など種々の遊びを行った。序の文意は、「規子内親王が斎宮となり、野宮に入られて庚申の日をむかえて、近従の者たちと徹宵されることになり、松声夜の琴に入る」の題で歌会を催されることになり、老残の身として恥ずかしことではあるが、今宵のことを後世の人に見せよとのおおせによつて、この文を書記する。」と言うものである。本序は『源順集』に収められている。

唐崎夜雨

夜の雨よまたも
のつらく夕風を
とわにうそくそ
からとてあはれま

栗津晴嵐

雲けふあはれに
つましくも舟を
手ねもた見の

あはれはくそよれ

矢橋帰帆

ま月ひまやんせ
りかつる舟は
打出のよもよみ
乃追風

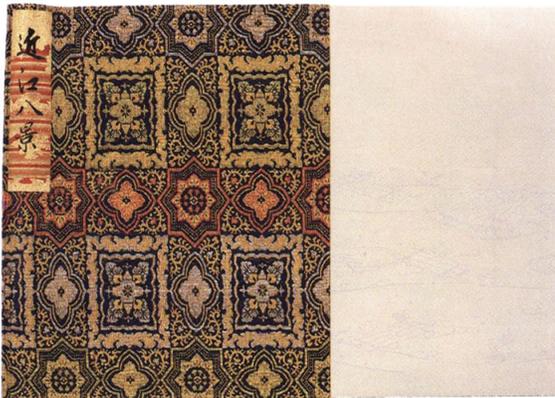
三井晚鐘

思ふそのあつた
契りけめんと先
さく三井此入を
乃こゑ

堅田落鷹

岩ありたふそ
越路より石は
かづにならひよ
おつれ鳥の子

巻首



表紙

7 近江八景和歌 一巻

総三四・〇×三二〇・一一

近江国(滋賀県)琵琶湖南部の湖畔にみられる八つの景勝地を詠んだ和歌、いわゆる名所和歌である。中国の瀟湘八景にならったもので、伝えによると家熙より八代遡った近衛家の当主政家が明応九年(一五〇〇)、近江の守護佐々木高頼の招きをうけて同国に滞在したとき、選定したとされ(『近江国輿地志略』五)、後代の基準となっている。ただ、政家の日記『後法興院関白記』には記述がないので真偽は不明。
近江八景はつぎのとおり。

- 唐崎夜雨(からさきのやう)
- 栗津晴嵐(あわづのせいらん)
- 矢橋帰帆(やばせのきはん)
- 三井晚鐘(みのばんしょう)
- 堅田落鷹(かただのらくがん)
- 石山秋月(いしやましゅうげつ)
- 勢多夕照(せたのせきしょう)
- 比良暮雪(ひらのぼせつ)

料紙は色変りの染紙(水色・縹・朱)を用い、紙背に雲母で流水に花筏を描いている。

南都寺藤

物も波も林の詞
乃をなれは心代
たかたけ程うそ
笑面人

佐保河童

花ほろりかけし
移してあをいり

浅瀬よあふさ

心ふあしれ

猿澤池月

水空ゆる海を

たほるとあそ

の池よりさく

月ハ空に

春日野鹿

かまふ山麓の鹿

わかむかしん

の野をり

うかくれ

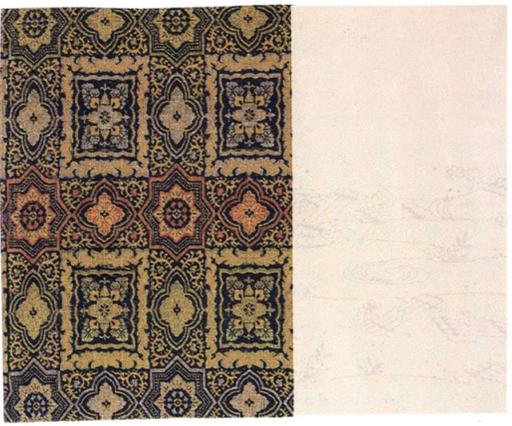
三笠山雪

こかたわらあり

たの先ハ白雪

海す心を水や知

巻首



表紙

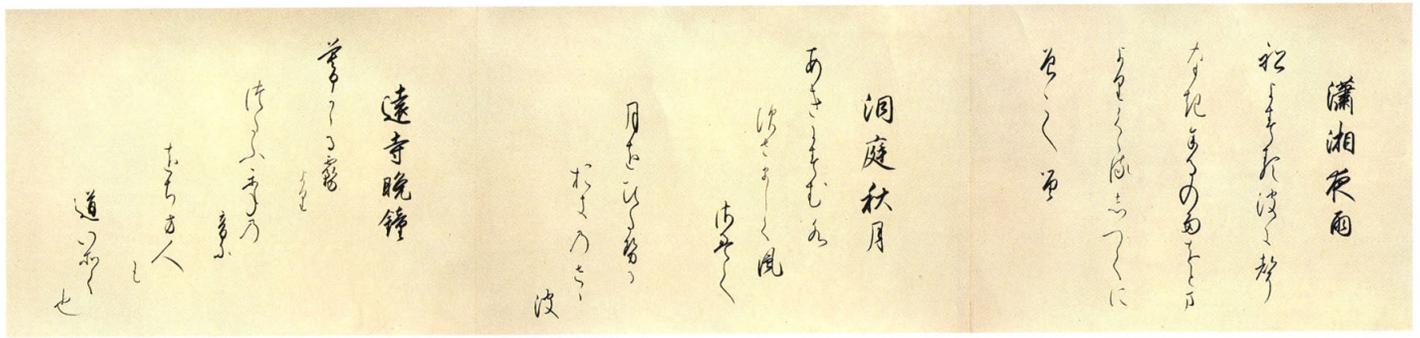
8 南都八景和歌 一巻

総三三・〇×三三・二一

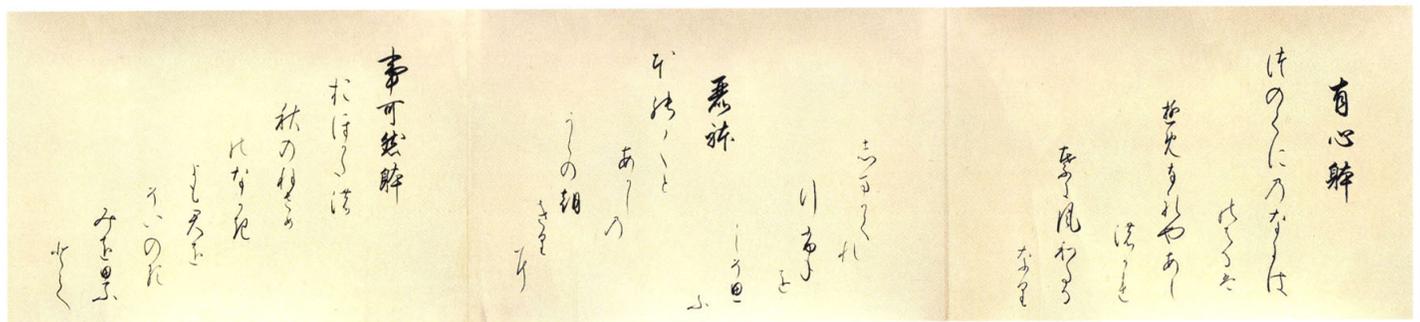
大和国(奈良県)の名所の八景を詠んだ和歌で、『応仁前記』によれば、南北朝末期、後小松天皇の至徳年間(一三八四〜八七)頃詩歌に堪能な公卿たちが「南京八景詩歌」を詠んだものとす。南圓堂藤題で、前関白左大臣近衛道嗣が漢詩を、太政大臣二条良基が和歌を、以下八景の詩歌をそれぞれ伝えている。本巻には漢詩はなく、八景の和歌のみで作者名を記さない。参考のため歌題と作者名を記しておく。

- 南圓堂藤 太政大臣二条良基
- 佐保河童 前内大臣三条公忠
- 猿沢池月 左近衛権少将飛鳥井雅幸朝臣
- 春日野鹿 権中納言一条公勝
- 三笠山雪 前右大臣西園寺實俊
- 雲井坂雨 権中納言二条爲重
- 東大寺鐘 前大納言四辻善成
- 轟橋行人 権中納小倉實遠

料紙は前項の南都八景和歌と同じで、色変りの染紙(朱・水色・縹)を用い、紙背に雲母で流水に花筏を描いている。



瀟湘八景和歌



十牀和歌

9 瀟湘八景和歌・十牀和歌

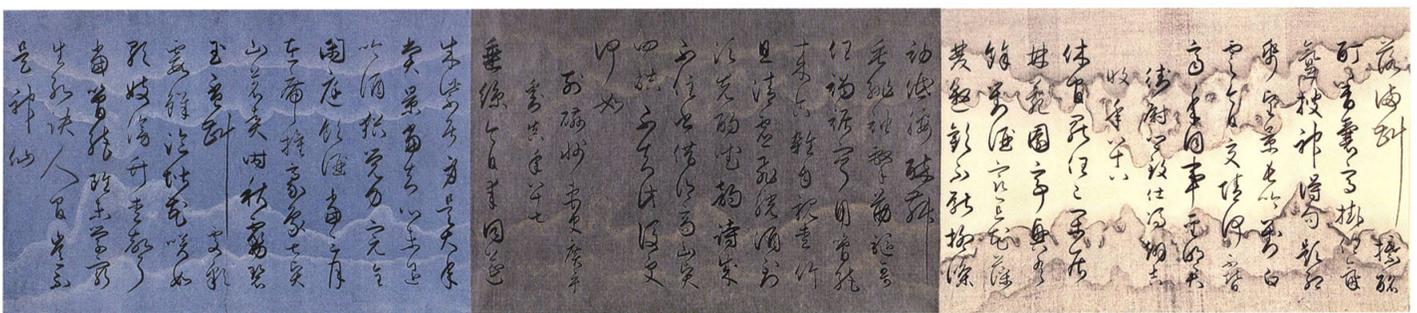
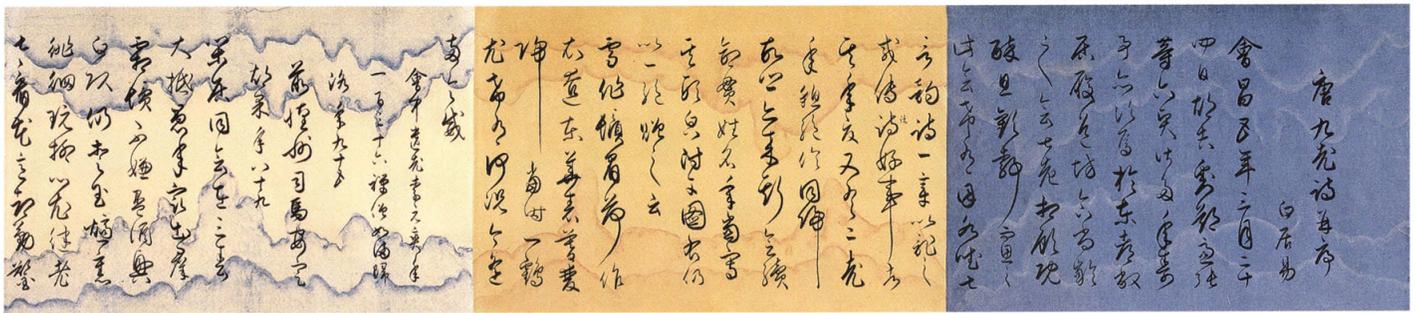
一卷

総三一・八×九四八・〇

中国の勝景地を歌題にした名所歌八首と歌論の作例十首の二篇をもとに散らし書したもの。『瀟湘八景和歌』は冷泉為相（藤原定家の孫、鎌倉時代の歌人）の詠と伝えるが、もちろん現地を訪れてのものではなく、為相の詠とは確認できない。瀟湘八景はつぎのとおり。

- 瀟湘夜雨（しょうしょうやう）
- 洞庭秋月（とうていしゅうげつ）
- 遠寺晚鐘（えんじばんしやう）
- 遠浦帰帆（えんぼきはん）
- 山市晴嵐（さんしせいらん）
- 漁村夕照（ぎよそんせきしやう）
- 江天暮雪（かうてんぼせつ）
- 平沙落鴈（へいさらくがん）

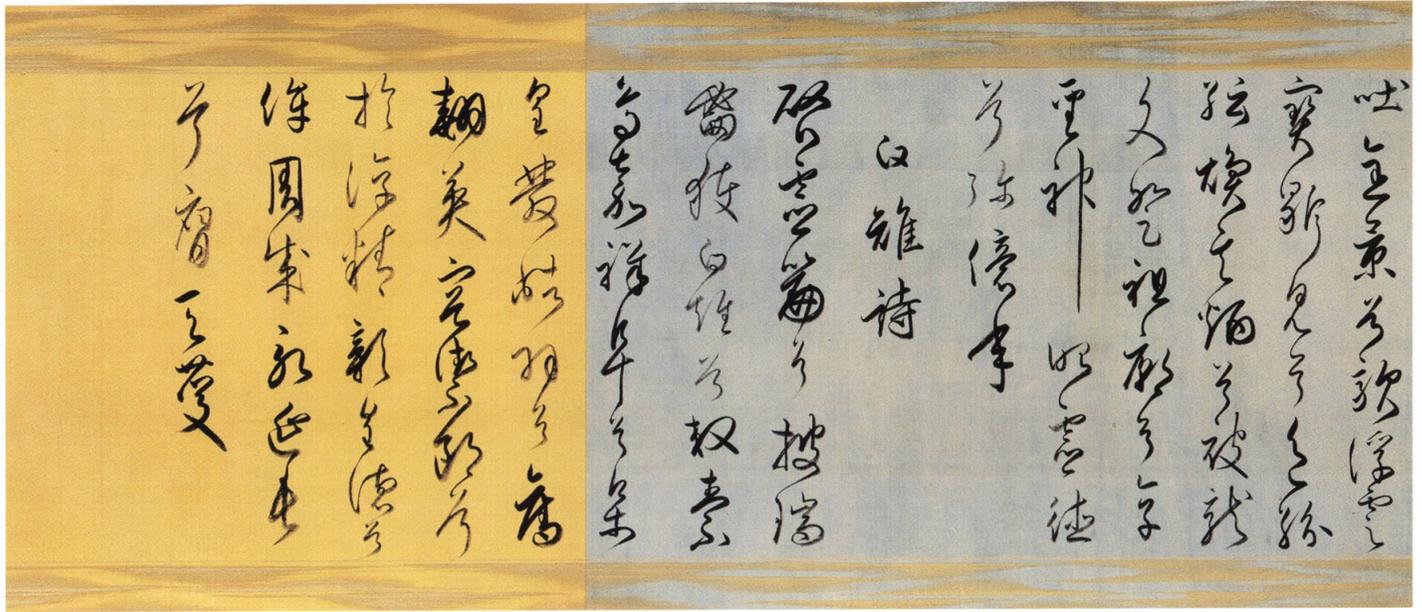
また、『十牀和歌』は藤原定家（鎌倉時代初期の名歌人）の著したといわれるもので、その十種類の和歌の形態の例証歌約三百首のなかから十首を選んだもの。この十首は後西天皇の宸筆の散らし書もあり、江戸時代にはしばしば用いられた。



12 白樂天尚函會詩 一卷

總一九・二〇九〇六・〇

尚は尊ぶ、函は齡で、高齡者を祝つて詩歌管絃の会を催すのが尚函会であり、その先蹤は白居易号樂天が催したものの。すなわち、會昌五年(八四五)三月に白居易が自宅に胡(安定胡旦)・吉(馮翊吉皎)・劉(廣平劉真)・鄭(滎陽鄭據)・盧(范陽盧貞)・張(清河張渾)の六人を招いて自らと七人で作詩し、祝宴をはった。その年の夏また二人の老人が訪れて来たので、前の七人と併せて、その形貌を写真したとする。その時の白居易の序と老人たちの詩を記す。さらに二百余年後の至和丙申年(一〇五六)八月十五日、白居易の故事を慕つて催した、宋の錢明逸が五人の老人の尚函会の序と詩を記した篇を付している。本書の原典は家熙が所有していた『古今事文類聚』であると思われ、家熙は草書でこの文を表しているが、その勉強の一端を窺うことができる。なお、料紙は色変わりの染紙に、表ばかりでなく、裏面にも打疊を配するという他に例をみない技巧的なものである。



東都賦卷末

13 西東兩都賦(文選) 二卷

(西) 総二七・四×一三三・八・〇
 (東) 総二七・四×一三四・〇

わが国に古くから影響を与えた中国の古典『文選』に収められている班孟堅作の『西東兩都賦』である。孟堅の作には他に兩都賦序の一篇があり、この兩都賦と一組となる。孟堅(二三二―九八)は後漢の歴史家、『漢書』の編者で詩賦に秀れた。賦は詩の一種、西都は長安、東都は洛陽を指したもので、西都長安に比して東都洛陽が優れていると論じたもの。西都賦は長安の客が洛陽の主人のもとに答えて、西都が地の利から建築を始めとし、豊富な産物、人物の輩出、最強の軍隊、都邑の繁栄を述べ、天子の偉大さを説き、西都を無視するな、東都は粗末で西都の比ではないとする。これに対して東都賦は、西都の天子は人間の物質的欲望を逞しくしたが、東都の天子は精神文化を重んずる。天地の秩序に依じて、礼法を強調し、儉約を旨とした。西都は天下平定が定まらないうちから未央宮を建てたが、東都は秩序が回復してから洛陽を建設し、さらに古法に基づき、礼法を守った。そして全編の主題の要約である明堂、辟雍、靈台、宝鼎、白雉の五篇の詩を付す。家熙はこの長文の賦を華麗な草書をもって書いている。料紙は絹本で、色変わりの裂を用い、上下に金の界線各一本を引き、欄外に金泥の霞を描いている。

古文孝經序

孔安國

孝經者何也孝者人之高
行經常也自有天地人民
以來而孝道著矣工有明
王則大化滂流充塞六合
若其無也則斯道滅息當
吾先君孔子之世周失其
柄諸侯力爭道德既隱禮
誣又廢至乃臣弑其君子
弑其父亂逆無紀莫之能
正是以夫子每於閑居而
歎述古之孝道也夫子數
先王之教於魯之洙泗門
徒三千人達者七十有二
也貫首弟子顏回閔子騫
冉伯牛仲弓性也至孝之
自然甘不待諭而寤者也
其餘則悻悻憤憤若存若
亡唯曾參躬行匹夫之孝
而未達天子諸侯以下揚
名顯親之事日侍坐而諮
問焉故夫子告其議於是
曾子喟然知孝之為大也
遂集而錄之名曰孝經與
五經並行於世逮乎六國
學校衰廢及秦始皇焚書

卷首

14 古文孝經 一帖

二八・八×一六・六

『孝經』は、中国戦国時代に孔子(前6～5世紀)が弟子の曾子と交わした孝道についての問答を、曾子の門人が記録したものとされる。孝經には古文と今文の二系統本があるが、古文は古代文字の書体で書かれたもの、今文は漢代に通行していた隸書で書かれていたといわれるもので、今文は十八章立からなり、玄宗皇帝の御註が有名で、古文は二十二章立で、孔安国の註とされるものが多い。わが国では男子が七歳になって学問を始めるにあたって孝經が使用され、とくに天子や將軍の讀書始めにはおおく用いられた。家熙が楷書で書いた本書は二十二章立で『古文孝經』であるが、手本とした書に不備があつたためか、最終章の喪親章を欠いている。



表紙

大唐三藏聖教序
 太宗文皇帝製
 蓋聞二儀有象顯
 覆載以含生四時
 無形潛寒暑以化
 物是以窺天鑿地
 庸愚皆識其端明
 陰洞陽賢哲罕窮
 其數然而天地苞
 乎陰陽而易識者
 以其有象也陰陽
 處乎天地而難窮
 者以其無形也故
 知象顯可徵雖愚
 不惑形潛莫覩在
 智猶迷況乎佛道
 崇虛乘幽控寂弘
 濟萬品典御十方

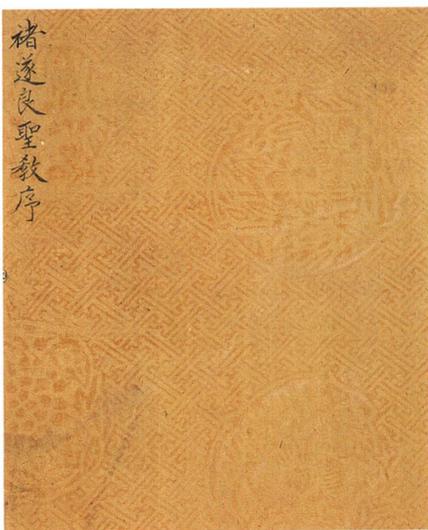
(卷首)

15 褚遂良書聖教序

一卷

二九・二×三五・七

玄奘三藏がインドから持ちかえり、自らなした仏教
 経卷の漢字訳の壮途を讃えた唐の太宗の撰文が聖教序
 で、皇太子の聖教序記とともに、唐代の名筆家褚遂良
 の手跡(六五三年)で石碑に刻まれ、今も西安の大雁塔
 に建てられている。本書は太宗の序のみで、原拓本と
 比較すると字体が瘦せているなど一致しない点が見ら
 れるので、臨書などを経た手本による筆写と思われる。
 楷書。



表紙

於	英	難	疾	夫	開	左	銀	義	隨
旂	聲	銜	風	素	國	庶	青	明	柱
常	煥	須	舛	秋	公	子	光	公	國
豈	乎	授	世	肅	于	上	祿	皇	左
若	記	命	艱	致	志	柱	大	甫	光
豐	牒	結	寔	勁	寧	國	夫	府	祿
起	徽	纓	忠	草	製	黎	行	君	大
蕭	烈	殉	臣	標		陽	太	之	夫
墉	著	國	赴	於		縣	子		和

卷首

16 歐陽詢書皇甫君碑

一帖

三三・〇×一八・二

皇甫君は隋王朝に仕えた名臣の一人。名は誕、字は玄憲、官は尚書左丞、晩年、楊諒が并州で反乱を起こしたとき、皇甫誕は節を守って従わず、諒のために殺害された。隋の煬帝はこれを悼み、柱国左光祿大夫を贈り、弘義郡公に封ぜられ、明公と諡された。その子無逸が父の功を顕彰して石碑を建てた。碑文は于志寧、書は歐陽詢である。歐陽詢(五五七〜六四二)は隋末、初頭の書家。建碑は貞観十一年(六三七)前後と考えられている。碑文は、陝西省博物館(西安碑林)に現存する。これも原拓に比べて脱文、欠字が多く見られるので、臨書などを経た手本による筆写と思われる。料紙は丹色の碁盤罫を引いた鳥の子紙で、楷書。



表紙

廣智三藏和尚茶
 毗之時追中謁者
 齋祝文祖祭申
 如在之敬睿詞
 切嘉薦令芳禮冠
 羣倫舉無與比伊
 年九月
 以舍利起塔於舊
 居寺院和尚性聰
 朗博貫前佛萬法

部分

17 徐浩書不空三藏碑 一帖

三三・四×二〇・二二

真言宗付法第六祖であるインド僧不空三藏、長安に
 招かれて大興善寺和尚とよばれた名僧の、その業績を
 記した碑文。撰文は建中二年(七八一)とあり和尚の旧
 院に建てられた。筆者徐浩(七〇三―七八二)は唐、越
 州(浙江)の人。字は季海。祖父師道、父嶠之ともに能
 書の名があり、父より書法を受ける。官は太子少師。書
 は草書、隸書に巧みであった。家熙の手本はやはり臨
 書などを経たものと思われる。楷書。



表紙

玉泉寺南三里澗下多深紅
躑躅繁艷殊常感惜題詩以
示遊者

玉泉南澗花奇恠不似花叢似火
堆今日多情唯我到每年無故為
誰開寧辭辛苦行三里更與留連
飲兩盃猶有一般孤負事不持歌
舞管絃未

早夏遊平原迴

夏早日初長南風草木香扇翠
平穩澗路甚清涼巖巖行看抹青
梅旋摘著瘵飢餐解渴一盞冷雲
漿

宿天竺寺迴

野寺經三宿都城復一還家仍念
嬌嫁身尚繫官班蕭洒秋臨水沈
吟晚下山長閑猶未得逐日且偷
閑

侍中晉公欲到東洛先蒙書

問期宿龍門思往感今輒獻
長句

昔蒙興化池頭送今許龍門潭上
期聚散但慙長見念榮枯安敢道
相思切成名遂未雖久雲卧山遊
去未遑閒託風情與筋力只如初
破蔡州時

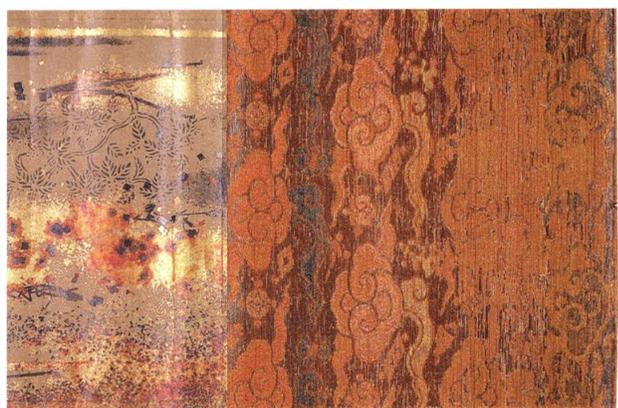
家熙翻刻文



内箱



内箱内部



表紙

一、名品の仕立て

18 「玉泉帖」付属品

家熙翻刻文、卷子表紙、内箱

三点

「玉泉帖」は、『白氏文章』巻64の四首の詩篇を、平安時代の能筆で、三跡の一人として名高い小野道風(八九四〜九六六)によって書かれたもの。明治十一年に近衛家から献上された名品の一つである。

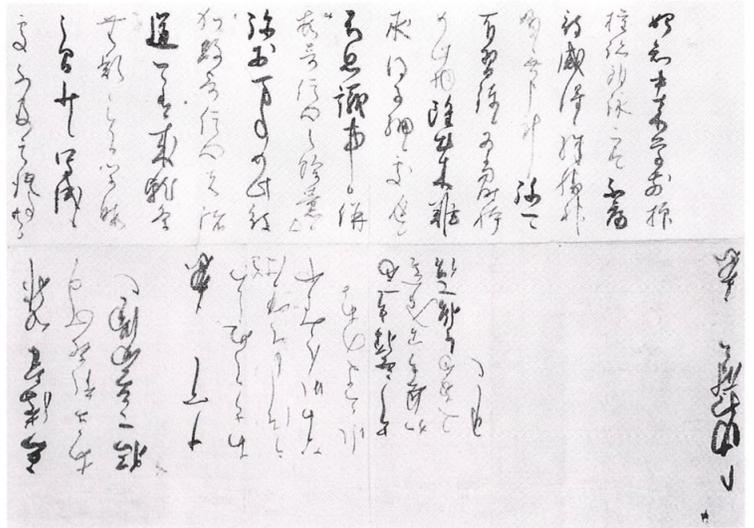
卷子の表紙裂は茶地瑞雲文繡珍。絵緯に紅、白、緑、黄、そして銀糸を用い、大きな雲の間に七宝や丁子などを表した、いわゆる瑞雲文で、中国からの舶載品と考えられる。その裏の見返しには、型によるかと考えられる牡丹唐草、萩(か?)、小笹、蝶が、金銀泥の霞と大きささまざまな形の箔の間に見える隠れするかのよう配されている。また本紙裏打ち紙には、桐や菊などの植物が唐草文風にアレンジされた文様に、金銀の大小様々な形の箔が自由に散らされている。軸は堅木に透漆を施し、梅、鳥、蝶を螺鈿で装飾したものである。

収納箱は四重であるが、卷子が直接取められる内箱は、表面は唐木の木肌をいかに仕上げ、蓋・身共に内側は黒漆地に蝶と鳥の時絵で装飾される。両側面には、菱形唐草文の繊細な紐通し金具があらわれている。

本品には、家熙にとされる翻刻文も付属しており、家熙の本品への関心の高さが示されている。また、これらの仕立ては、いずれも家熙によるものと考えられ、名品に相応しい格のある仕立てには、家熙の本品に対する鑑識の深さと、敬愛の念が窺える。



漆箱収納袋



基熙から家熙宛の書状



収納箱

19 「粘葉本和漢朗詠集」付属品
基熙書状、漆箱、袋 三点

作品は、白・黄・藍等の具引きの上に、亀甲・牡丹・雲鶴・唐草等の文様を雲母で摺りだした、いわゆる唐紙に、藤原公任(九六六〜一〇四二)撰の『和漢朗詠集』を書写したもので、流麗な仮名と柔らかな漢字が絶妙に融合した文字の美しさは、王朝屈指の名品とされる。明治十一年、近衛家献上の品である。

本品には、父・基熙から家熙に宛てた書状が一通付属している。その文意は、家熙が本品を思いがけなく入手したことを喜び、この名品を手本として、なお書道の習練に努めるよう勧めている。また、名品を入手したことは、家熙の「数奇信心之余薫(風雅の道に心を寄せ、努力した賜物)であり、なお努力すれば、諸道を極めることは疑いないと励ましている。書状の年次は不明であるが、家熙を内相府(内大臣)としていたことから、家熙が二〇歳(貞享三)〜二七歳(元禄〇)の間のもと考えられる。

現状では、四重箱に収められるが、家熙の時期には二重目からの三重箱であった。その最も内箱は、黒漆地に鶴丸文の蒔絵を散らした品の良い漆箱である。また、その収納袋は白茶地蜀江形段織文繻珍で、家熙が摂政を勤めた中御門天皇(在位一七〇九〜三五、崩御一七三七)の和歌懐紙(陽明文庫蔵、参考作品③)の中廻しにも用いられている船載品である。いずれも品格の高さを象徴した仕立てであろう。



表紙



漆箱収納袋



漆箱

20 「七徳舞」付属品
帖表紙、漆箱、袋 三点

「七徳舞」は、唐の詩人・白居易の詩文集『白紙文集』の巻第三の巻頭部分を、緑や黄などに染めた絹地に、金銀泥で蝶鳥や草花などの下絵を施した料紙に草書で認めたもの。現状は帖仕立てで、本紙はかなり褪色しているが、もとは色鮮やかな卷子であったと考えられる名品である。本品もまた、明治十一年の近衛家献上の一つである。

帖の表紙裂は、色鮮やかな紅地万曆蜀江文繡珍で、やはり舶載品と考えられる。後土御門天皇（一四四二～一五〇〇）の和歌詠草（陽明文庫蔵、参考作品④）の表具の上下にも類似の裂が用いられているほか、同じ裂地が陽明文庫に保存されている。

三重箱の最も内側の箱は、黒漆地に研ぎ出し蒔絵の技法によって鳳凰一対が表された豪華な漆箱で、江戸時代中期の蒔絵の優品と言えよう。さらに、この漆箱を収納する袋は、紺茶地紋入り小石畳文経縞が用いられている。この裂は、後西天皇勅作茶杓（陽明文庫蔵、参考作品④）を納める袋にも用いられ、またこの裂地が別途陽明文庫にも保管されている。

いずれの仕立ても、名品ならではの品格を備えている。



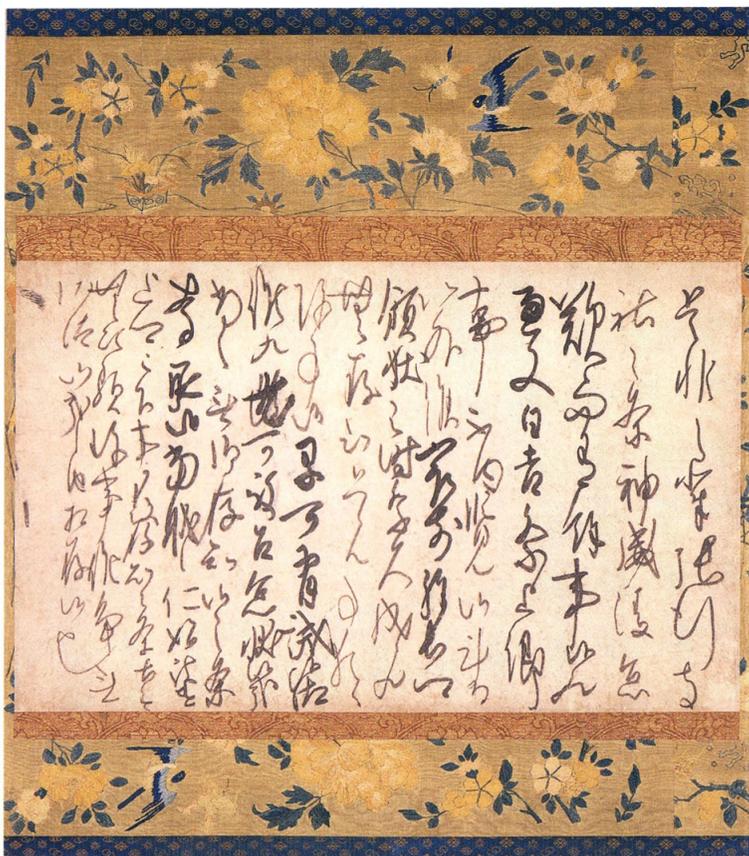
21 「平重盛書状」表装

総一二五・五×六五・五

本紙は、伝統的な世尊寺流を学んだ巧みな筆致にその能書ぶりが窺える平重盛（平清盛の長男、一一三八～七九）の自筆書状で、明治十一年に近衛家から献上された貴重な作品である。

その希有な遺品を飾る表装裂は、一文字と風帯は鶴や扇子などの宝尽しの文様を表した銀欄、中廻しが黄地にグラジオラス文様を織りだした金モール織、上下が紺地鶴亀梅牡丹宝散らし丸文の繻珍である。中国やペルシャからの舶載の裂地と日本製の裂地を取り合わせた華やかな仕立てには、家熙の型にははまらない、自由な感覚と発想の一面が窺える。

なお、上下の裂は、陽明文庫所蔵の「後桜町天皇 和歌懐紙」の裂と同じものである。



22 「帥大納言経信卿消息」表装

総一二二・五×五二・九

本紙は、源経信(一〇一六〜九七)の書状と伝えられるが、内容や筆跡からは経信とは言い難く、同時代の高位の公家の書状と考えられている。しかし、筆跡は三跡の一人・藤原佐理の書風を受け継ぐ特徴ある草書で認められた優品である。本品もまた、明治十一年に、近衛家より献上されている。

本品の一字と風帯は牡丹唐草文の金襴、中廻しは薄萌黄地に多彩な花鳥を刺繍した裂地、上下は紺地に数種類の小花文に竜と鳳凰の丸文を織り入れた緞子を用いる。

中廻しに用いられるような繊い取りによる華やかな裂地は、陽明文庫所蔵の掛幅にも多く用いられており、優品の表装に対する家熙の考え方、好みを特徴づけている。



23 「貫之集断簡」表装

総一二九・〇×五五・八

収納箱に納められる小紙片によれば、紀貫之の和歌八首が書せられる本作品は、家熙によって、平安時代後期の能書である藤原公任筆と伝えられる。陽明文庫に伝わる家熙の『子楽院臨書手鑑』の中に、この掛幅を写したものがあり、華やかな家熙好みの表装も含めて、本作品が家熙の優れた鑑識眼にかなった品であったことを示している。明治十一年、近衛家献上。

表装裂は、一字と風帯が牡丹唐草文の金襴、上下が紺地に花文の緞子。珍しいのは中廻しの裂で、銀箔糸で地をつくり、絵緯に紅、白、萌黄、緑、縹などの燃りのあまりない糸を用いて、鳳凰、鶴、鷺などの鳥の文様を、別絡みの細い縦糸で織った裂地である。能衣裳などに用いられた唐織と考えられる。

24 「藤原為家書状」表装

総一八・〇×五三・七

藤原定家の嫡男・為家(二一九八〜二二七五)の書状で、葛木(城)山が詠み込まれた歌についての内容であることから葛城山消息とも称される。本作品もまた、明治十一年に近衛家から献上されたものである。

表装の一字と風帯は茶地唐草文の銀欄、中廻しは白地紗綾形菊唐草文銀欄、そして、上下には縹地梅花文緞子に、波濤飛龍と梅や牡丹、宝珠や丁子などの吉祥を表す繡取の裂を用いている。名品を鑑賞する心と、愛でる心が一体化した表装とも言えよう。



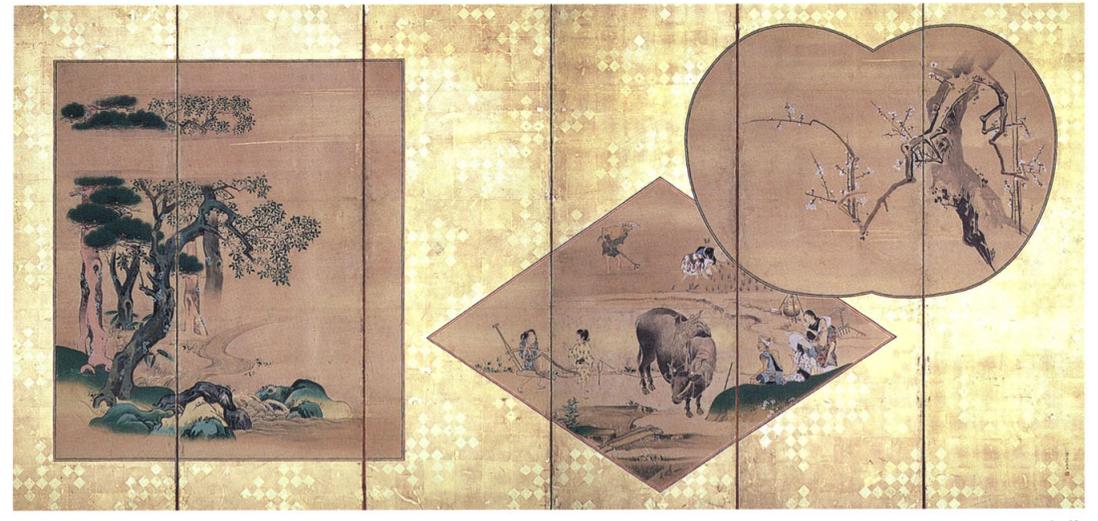
三、お抱え絵師

25 四季図屏風 六曲一双 渡辺始興筆

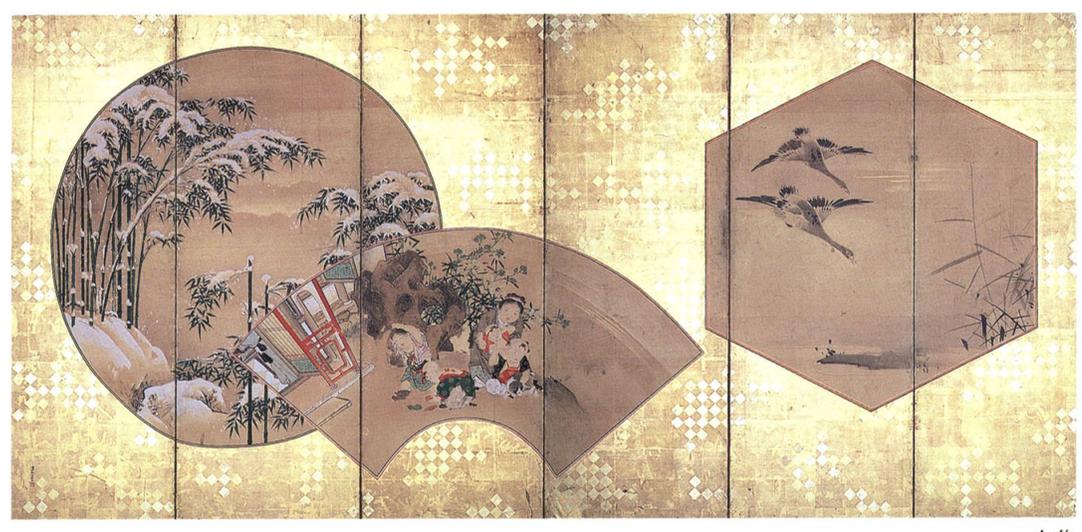
各総一九一・五×三九七・六

家熙のお抱え絵師として成長し、活躍した渡辺始興（求馬、一六三八〜一七五五）が、禁裏で使用するために制作した屏風である。御物として保管されていた時代に、その名称の一部に「鴨居隠」と付けられていたように、禁裏の建物の高い長押の位置を配慮して、通常の屏風よりも大型となっている。本屏風は、安永八年（一七七九）や天明六年（一七八六）の『御屏風目録』に、「團扇押繪形 渡邊求馬筆 一雙」と記載されている。制作されて以後、皇室に伝わり、京都御所に保管されていた屏風である。

始興は、町絵師時代に狩野派を学んだ後、尾形光琳に師事したと、多くの画史、画論書に記述され、家熙に仕えて後は、大きく作風を展開したとされる。本作品の場合、大画面に団扇、菱、方、六角、扇、円の形を配置した中に、和漢の異なった季節の画題を描き、また金地の上には小型の青金の箔を斜めに貼りつめるといった装飾性に大きな特徴があると言えよう。またその描写は、構図の空間処理の巧さと筆線を活かした水墨による表現、また、やはり墨筆線の抑揚表現を大切にしながら、人物や樹木、草花には、写生や模写で培った繊細で穏やかな大和絵による表現がある。確かに、全体の構成、描写からは、狩野派、琳派を学んだであろうこと、そして家熙との交流によって培われた感性を窺うことが出来る。



右隻



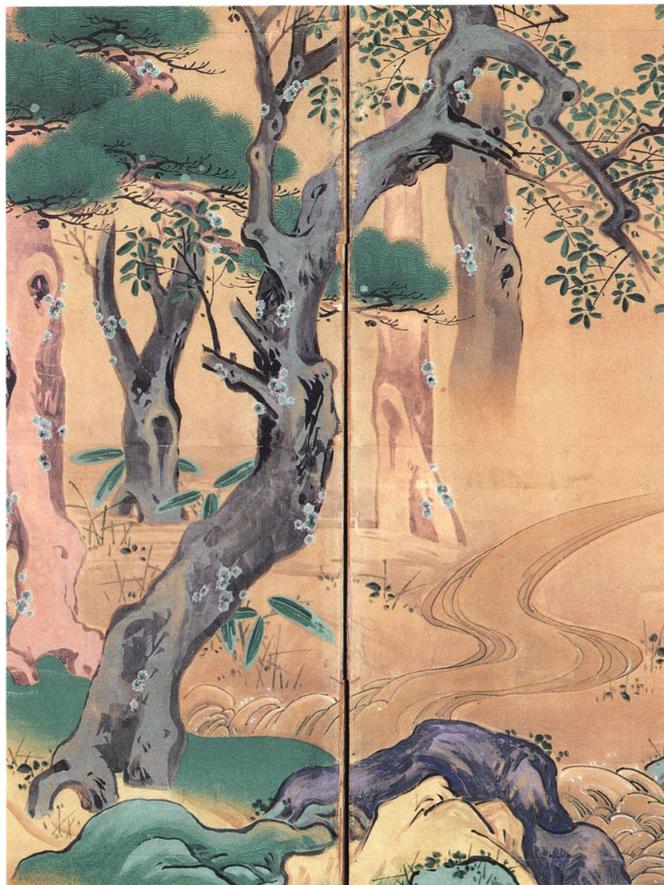
左隻



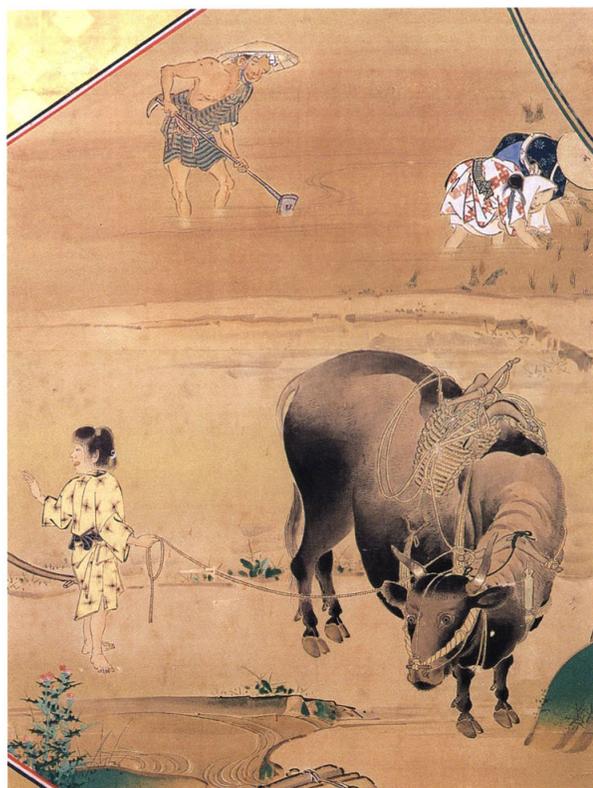
落款印章



右隻部分



右隻部分



右隻部分

本作品の制作年代は明確に出来ないが、始興に関してすでに紹介された史料のうち、木村探元の『京都日記』の記述にある、享保十九年（一七三四）十二月十八日条の「禁中御用之御屏風」との関連を想起する。この頃、五十歳頃の始興は、家熙の様々な御用を勤め、「春日権現験記絵巻」二十巻の模写を終えるなど、仕事の内容、量ともに充実した時期であり、絵師としても高い位置にあったと考えられている。また享保十四年には、家熙が中御門天皇の勅命によって「宋書六箴屏風」（参考作品①）を書き、天皇は大変お喜びになって、褒賞の宸翰御製を家熙に賜っている。さらに、『山本臨乗手録』の記載によれば、始興は中御門天皇の時に禁中で用いられたとあり、『渡辺家系譜』によれば、享保二年に東宮御所に召されて寛保二年（一七四二）にはその職を退いたとある。このような経緯を考えれば、始興が禁裏の屏風を制作する機会、やはり家熙が没する元文元年（一七三〇）以前の可能性が高いのではなからうか。落款印章も含めて、始興の作品の編年や作風の展開などは、これからの研究課題ではあるが、始興の作画活動の背景からは、本屏風が享保十九年の「禁中御用之御屏風」に相当する可能性も十分に考えられよう。



左隻部分



左隻部分



左隻部分

①御物 草書六箴屏風 近衛家熙筆（侍從職保管）

③中御門天皇 和歌懷紙 (陽明文庫藏)

②後土御門天皇 和歌詠草 (陽明文庫藏)

④後西天皇勅作茶杓 (陽明文庫藏)

⑤花木真写 近衛家熙筆（陽明文庫蔵）

夏の巻

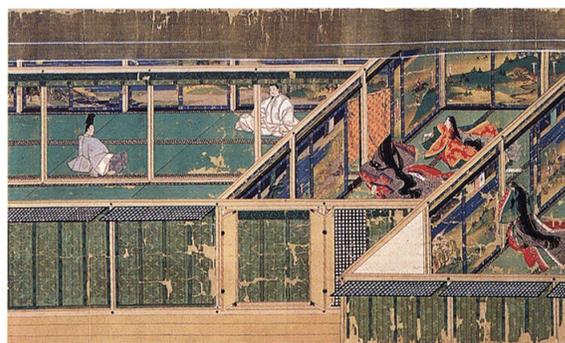
春の巻

秋の巻

夏の巻

⑥春日権現験記絵巻模本 絵一渡辺始興筆（陽明文庫蔵）
〈下〉春日権現験記絵巻（鎌倉時代、1309年、当館蔵）

第3巻第1段



第5巻第2段



翻刻

【近衛家熙——風雅の探究】



わ
東

あ
あ
あ

の
あ
あ

ら
あ
あ

1 二十一代集巻頭和歌

古今和歌集

在原元方

としのうちに春はき にけり一年をこそ
とやいはむことしとや いはん

後撰和歌集

藤原敏行朝臣

ふる雪のみしろ ころもうちきつ、
はるきにけりと おどろかれぬる

拾遺和歌集

壬生忠岑

春たつといふば かりにやみ よしの、
山もか すみて けさは 見ゆ らん

後拾遺和歌集

小大君

いかにねておくるあ したにいふことぞ
きのふをこそと 今日をことしと

金葉和歌集

修理大夫 顕季

打なびき春は きにけり山 川の
いは まの こほり けふや 解らん

詞花和歌集

大藏匡房

氷るし志賀の 唐崎うち解て
さゝ波よする 春風ぞふく

千載倭調集

源俊賴朝臣

はるのくる あしたの 原を みわた せば
かすみも けふぞ たち はじめ ける

新古今和歌集

摂政太政大臣(藤原良経)

みよし野は山も かすみてしら 雪の
ふりにしりに はるはきに けり

新勅撰和歌集

御製(後堀河院)

あら玉の年も かはらでたつ 春はかすみ ばかりぞ
空にしり ける

続後撰和歌集

皇太后宮大夫俊成

年のうちに春たち ぬとやよし野山

かすみかゝれる 峯のしらゆき

続古今和歌集

前中納言 定家

名にたかき 天のかぐ山 けふしこそ
雲井に かすみ春 やきぬ らむ

続拾遺和歌集

前大納言為家

あら玉の年は一夜の へだてにて
けふより春とたつ 霞かな

新後撰和歌集

前大納言為氏

さほ姫の 霞の ころも 冬 かけて
ゆきげ の空に 春は来 にけり

玉葉和歌集

紀貫之

けふに明て きのふに にぬは
みな人 の心に はるの たちに けらしな

続千載和歌集

前中納言 定家

出る日の おなじ光に わたつ 海の
なみにも けふや はるは たつ 覧

続続拾遺和歌集

前大納言為世

今朝よりや春は きぬらんあら 玉の
としたち かへりかすむ そら哉

風雅和歌集

前大納言為兼

あし曳の山 の白雪けぬ がうへに
はるてふ けふは霞 たなびく

新千載和歌集

皇太后宮大夫俊成

はるやたつゆきげの くもはまきもくの
ひはらに かすみ たなびき にけり

新拾遺和歌集

中納言 為藤

明わたる 空にし られて 久堅の
岩戸の せきを 春や こゆ 覧

新後拾遺和歌集

前大納言為定

天津空霞隔て、 久方の雲井遙に

春やたつらむ

新続古今和歌集

權中納言雅縁

春きぬといふより ゆきのふる年を
よもにへだて、 たつ霞かな

2 中古三千六人歌合

(題簽)
中古歌仙

(表)

左 後久我 前太政 大臣
あけぼの やかは せの なみの たかせ 船
くだすか 人の そでの 秋 きり

右 從二位 家隆
露しぐれ もる山 かげの した 紅葉
ぬるとも おらん 秋の かた みに

左 大納言通具
しもこぼる そでにも影は のこりけり
露より なれし あり明 のつき

右 藤原秀能
風ふけばよそに なるみのかたおも ひ
おもはぬなみに なくちどりかな

左 式子 内親 王
さむしろの よはの 衣手 さえく て
初雪白 し 岡の 辺の 柵

右 崇 徳 院
みかりする かのの、 みのに ふるあ られあ
なかま まだき 鳥も こそ たて

左 後法性寺入道前関白 太政大臣
しのぶるに こゝろの ひまは なければども
猶もる ものは涙なりけり

右 二条院 讀岐
みるめにも いらぬる いその 草 ならめ
袖さへ波の したに 朽ぬる

左 徳大寺左大臣
さめてのち ゆめなり けりと おもふ にも
逢は わかれ の おしく やは あらぬ

右 源俊頼 朝臣
あしのや の しづはた 帯の かつむ すび
心 やすく も うち とくる かな

左 正三位知家
これもまた なぎわかれに なりやせむ
くれを待てき いのちならねば

右 西園寺 入道 前太政大臣
こひわぶる なみだや そとにくもる 覧
ひかりも かはる ねやの つき影

左 八条院高倉
いかゞふく身 にしむいろ のかはる かな
たのむる 暮の松 かぜの 声

右 小侍従
つらきをもうらみぬ われに ならふ なよ
うき身を しらぬ 人も こそ あれ

左 大納言経信
夕日 さす あさ ぢが 原の たび 人は
あはれ いづ くに 宿を かる 覧

右 前大納言 忠良
おりにあへば これもさす がに あはれ なり
小田の かはづの ゆふ 暮の こえ

左 前大納言兼宗
世をすつる こゝろは なぞな かりける
うきをう しとは 思ひしれども

右 藤原清輔朝臣
としへたる宇治 の橋もりことゝはむ
いくよになりぬ 水のみな かな

(裏)

左 後鳥羽院
うぐひすのなげども いまだ降雪にすぎ
の葉しろきあふさか のやま

右 前中納言定家
梅のはなにほひ をうつす袖の うへに
のきもる月の かげぞあらすふ

左 後鳥羽院 宮内卿
うすくこき 野辺の みどりの 若草 に
あとまで みゆる 雪の むら消

右 参議雅経

岩根ふみかさなる やまを分すて、
はなも 幾重の あとの しら雲

左 能因法師
山ぎとの はるの 夕暮 きて みれば
入あひの 鐘に花ぞ 散ける

右 後京極撰政 前太政大臣
忘るなよたの むの沢を たつ鴈もいなば
のかぜの 秋のゆふ暮

左 皇太后宮大夫俊成
こまとめて猶 水かはんやま ぶきの
はなの露 そふ井手 の玉川

右 寂蓮法師
くれて ゆく はるの みな とはしらね
ども霞に おつる 宇治の しば船

左 六条前太政大臣
ほとゝぎす なきて いるさの 山のはは
月ゆへより も うらめしき かな

右 藤原基俊
たまかしは しげりに けりな 五月 雨に
はまりの かみの しめはふる まで

左 従三位頼政
庭のおもは まだかはかぬ に夕立の
そらさりげ なくすめる つき哉

右 前大僧正 慈鎮
雲まよふ ゆふべにあき をこめな なら
かぜも ほに いでぬ 荻の うへ哉

左 法橋顯昭
水くきの 岡のくず はも いろづきて
けさうら かなし秋のは つかぜ

右 鴨長明
あきかぜの いたりいた らぬぞでは あらじたま
われからの 露の夕暮

左 大藏卿有家
風わたるあさ ぢがすゑの露 にだにやどり
もはてぬよひ のいなづま

右 宜秋門院 丹後
忘れじな なには の あきの 夜半の そら
ことうらに すむ 月は みる とも

左 皇太后宮 大夫俊成女
あくがれて ねぬよの塵のつも るまで
月にはら はぬ床 のさむ しろ

右 西行法師
きりくす よさむに あきの なるまゝに
よはるか 声の 遠ざかり 行

3 新六歌仙并古歌

(新六歌仙)

後京極撰政前太政大臣(良経)
故郷の本あらの 小萩咲しよりよ
なく庭のつき ぞうつろふ

前大僧正慈円
ふけゆかば煙も あらじしほがまの
うらみなはてそ 秋のよの月

皇太后宮大夫俊成
大井河かゞりさ し行鶴かひ舟
いくせに夏の 夜をあかすらむ

西行法師
山里のつき まつ秋の夕 暮はかどた
の風の音のみぞする

前中納言定家
まつ人のふもと の道は絶ぬらん
軒端のすぎに 雪おもる也

従二位家隆
けふみれば雲も 桜にうづもれ
てかすみかねた るみよし野のやま

(古歌)

(後鳥羽院)
うぐひすのなげ どもいまだふる 雪に
すぎの葉しろき あふさかのやま

(皇太后宮大夫俊成)
またや みむ かたの、みの、 さくら がり
はなの 雪ちる 春のあ けぼの

(寂蓮法師)
くれて行 はるの みなとは しらね ども
霞に おつる うぢの 柴ふね

(藤原良経)
いさり 火の むかし の光 ほの みえて あしやの
さとに とぶ ほたる かな

(藤原道家)
よし野河 かはなみ はやく みそぎ して
しらゆふ はなの かすま ざるらし

(祐子内親王家紀伊)
をくつゆも しづこゝろ なく あきか ぜに
みだれて さける まのゝ はぎ 原

(宮内卿)
こゝろあるをじま のあまのたもと かな
月やどれ とは ぬれぬ 物から

(慈円)
大江山 かたぶく つきの かげ さえて
鳥羽田 の面に おつる 鴈がね

(藤原定家)
駒とめて そで うち はらふ かげ
もなし さのゝ わたりの 雪の夕 ぐれ

(西園寺公経)
ちよふべき難波 のあしのよを かさねしもの
ふりはの鶴 の毛衣

4 新六歌仙

(題簽)
新六歌仙

(表)

後京極摂政前太政大臣
空は猶かすみもやらず かぜさえてゆきげに
くもるはるの夜の月
さそはれぬひとの ためとや残りけむ
あすよりさきの 花のしら雪

前大僧正慈円
更ゆかば けぶりも あらじし ほがまの
うらみな はてそあき のよの月
鴈のくる ふしみの 小田に ゆめさ めて
ねぬ よの いほに 月をみる哉

皇太后宮大夫俊成
雨そゝぐはなたち ばなに風すぎ
て山ほとゝぎす 雲に 鳴也

大井河簀さ し行鶴かひ 舟いく瀬に
夏の夜を あかす覧

前中納言定家
むめの花にほ ひをうつす その上
のきもる 月の 影ぞ あらそふ
ときわかぬ なみさへ 色にいづみがは
は、その もりに あらし吹くらし

従二位 家隆
おもふ どりち そこと も しらず 行くれぬ
花 の宿かせ 野辺 の鶯
あきのよの月やをし まのあまの原
明がたち かきおきのつりふね

西行法師
さびしさにたへ たる人のまたも
あれな庵ならべん 冬の山ざと
をやまだのいほ近く なくしかの音に
おどろかされて おどろかすかな

(裏)

後京極摂政前太政大臣
そらはなをかすみも やらずかぜさえてゆき
げにくもる春の夜 のつき
さそはれぬ 人のため とや残り けむ
あす より さきの はなの しら雪

(裏)

前大僧正慈円
ふけゆかば煙も あらじしほがまの
うらみなはてそ 秋のよのつき
鴈のくる ふしみの 小田に ゆめさ めて
ねぬよの いほに 月を みる かな

皇太后宮大夫俊成

あめそゝぐ 花たち ば なに 風すぎ て
山時鳥 雲 に 啼也
大井河 かまりさ しゆく うかひ舟
いく せに なつ の よをあ かす覧

前中納言定家

むめのはな にほひを うつすそで のうへに
のきもる つきの かげぞあ らそふ
ときわかぬ 波さへ色 に いづみがは
は、その もりに あらし ふくら し

従二位家隆

おもふどりちそこ ともしらずゆき くれぬはなの
宿かせ野辺 のうぐひす
秋の夜 のつきやをし まのあ まのはらあけ

がたち かきお きのつ りふね

西行法師

さびしさにたへたる 人の またも
あれな いほり ならべん冬の山ざと
小山田のいほ近く なくしか の音に
おどろか されて おどろか すかな

5 十二月花鳥和歌

正月

柳

うちなびきはるくる 風の色なれや日をへ
てそむるあをやぎ のいと

鶯

はるきてはいく日も すぎぬ朝戸出に
うぐひすきぬる まどのむら竹

二月

桜

かざしおるみちゆき 人のたもとまで
さくらに にほふ きさら ぎの そら

雉

かりひとの霞に たどるはる の日を
つまとふ きじ の声に たつ覧

三月

藤

行はるの かたみと やさくふ ぢの花
そをだに 後の色 のゆかりに

雲雀

すみれさく ひばりの とこにやど かりて
野を なつ かしみ くらす 春かな

四月

卯花

しろたへの ころも ほすてふ 夏のきて
かきねも たはに 咲る うのはな

郭公

ほとゝぎす しのぶ の里に さとなれよ まだうの
はなの さつ きまつ ころ

五月

盧橘

時鳥なくや さつきの 宿かほに

松風は
きみにひかれて
千世そふる
らむ
(余白)

7
8

7 近江八景和歌

唐崎夜雨
夜の雨にをとを
ゆづりて夕風を
よそにぞたてる
からさの姿

粟津晴嵐
雲はらふあらしに
つれて百舟も
千船もなみの
あはつにぞよる

矢橋帰帆
まほひきてやばせ
にかへる舟はいま
打出のはまを跡
の追風

三井晚鐘
思ふそのあかつき
契るはじめぞと先
きく三井の入逢
のこゑ

堅田落鷹
峯あまたこえて
越路にまつ近き
かたゝになびき
おつる鷹がね

石山秋月
石山やにほの海
てる月影は赤石
もすまも外なら
ぬかな

勢多夕照
露時雨もる山
遠く過來つゝ
夕日のわたる
せたの長橋

比良暮雪
雪はるゝひらの
高ねの夕ぐれは
花のさかりに
すぐる春哉

8 南都八景和歌

南園堂藤
ふち波は神の詞
の花なれば八千代
をかけて猶ぞさ
かへん

佐保河蚩
飛ほたるかげを
移してさほ河の
浅瀬にふかき
心をぞしる

猿澤池月
長閑なる浪にぞ
こほるさるさは
の池より遠く
月は澄とも

春日野鹿
かすが山嶺の嵐
やさむからん麓
の野辺にしか
ぞなくなる

三笠山雪
三かさやまさして
たのめば白雪の
深き心を神や知
覧

雲井坂雨
村雨の晴まに
こえよ雲井さか
三笠の山は程
近とも

東大寺鐘
をく霜の華い
つくしき名も高
し故ぬるてらの
かねの響きに

轟橋行人
打渡る人めも絶
ず行駒のふみ
こそならせとゞろき
のはし

9 瀟湘八景和歌・十牀和歌

(瀟湘八景和歌)

瀟湘夜雨
船よする波に声 なきよるの雨をとま
よりくゝるしづくに ぞしる

洞庭秋月
あきに住む水 すさまじく風 さえて
月をひたせる おきのさゝ 波

遠寺晚鐘
暮かゝる露 より つたふかねの 音に
をち方人も 道いそぐ也

遠浦帰帆
風むかふ 雲の うきなみ たつ とみて
つりせぬ さきに かへる舟 人

山市晴嵐
奈たかき里より うへの みねは れて
あらしに しつむ 山もとの くも

漁村夕照
なみの色は 入日の すえに なを みえて
いそぎは くらき こがくれ のいほ

江天暮雪
あしの葉にかゝれる 雪も深き 江の
みぎはの色はゆふべ ともし

平沙落雁
まつあさる あし辺の とともに さそはれて
そら ゆく かりも 又く だる なり

(十牀和歌)
侘ぬればいまはた おなじ難波なるみを
つくしてもあはむと ぞ思ふ

長高躰
おもふことなど とふ人のなか ららん
あふげば空に 月ぞさやけき

有心躰
つのかれのなにはのはるは ゆめなれやあし
のかれ 葉に風わたる なり

麗躰
ほのくると あかしの うらの朝 ぎりに
しまがくれ 行ふねを しぞ思ふ

事可然躰
おほかたの 秋のねざめ のながき よも君を
ぞいのる みを思ふ とて

面白躰
山里に うきよ いとはむ とも、 がな
くやくし すぎし 昔かた らむ

濃躰
ちらすなよしの、は くさのかりにても
つゆか、るべき そでの上 かは

見様躰
むらさめの 露もまだ ひぬ まきの 葉に
霧たち のぼる 秋の夕 ぐれ

有一節躰
たちかへり又 もきてみむ 松嶋やをし
まの筥屋波 にあらずな

拉鬼躰
ぬれてほす玉くし のはの露しもに
あまてるひかり 幾世へぬらん

10 予楽院撰政筆詩歌

(瀟湘八景詩 東坡或いは玉澗 行書)

瀟湘夜雨

先自空江易断
魂、凍雲粘雨湿
黄昏、孤灯篷裏
聽簫瑟、只向竹
枝添淚痕、

洞庭秋月

西風翦出暮天
霞、萬頃煙波浴
桂花、漁笛不知
鬪客恨、直吹寒
影過蘆花、

烟寺晚鐘
雲遮不見梵王
宮、殷々鐘声
訴晚風、此去上
方猶遠近、為言
只在此山中、

遠浦歸帆

鷺界青山一抹
秋、潮平銀浪接
天流、歸壻漸
入蘆花去家在
夕陽江上頭、

山市晴嵐

一竿酒旆斜陽
裏、數簇人家煙
嶂中、山路醉眠
歸去晚、太平
無日不春風、

漁村夕照

薄暮沙汀惑亂
鴉、江南江北鬧
魚蝦、呼童買酒
大家醉、臥見西
風舞荻花、

江天暮雪

雪淡天低糝玉
塵、扁舟一葉寄
吟身、前灣啣吼
數声槽、疑是
山陰乘興人、

平沙落雁

古字書空淡墨
橫、幾行秋雁下
寒汀、蘆花錯作
衡陽雪、誤向斜
陽刷凍翎、

(瀟湘八景詩

瀟湘夜雨

古渡沙平漲水
痕、一蓬寒雨滴
黃昏、蘭枯蕙死
無尋處、短些難
招楚客魂、

玉澗 草書

洞庭秋月
四面平湖月滿
山、一阿螺髻鏡
中看、岳陽
樓上聽長笛、訴
盡崎嶇行路
難、

煙寺晚鐘

鐘送斜陽出
暮山、遙知煙寺
隔前灣、山翁莫
怪歸來晚、欲
待峯頭月上還、

遠浦歸帆

無邊剎境入毫
端、帆落秋江隱
暮風、殘照未收
漁火動、老翁閑
自說江南、

山市晴嵐

雨拖雲脚斂長
沙、陰々殘虹帶
晚霞、尤好市橋
官柳外、酒旗搖
曳客思家、

漁村夕照

一江晴日滿砂
汀、賣與魚米酒
半醒、蓑笠未乾
椰板靜、一聲
橫笛數峯青、

江天暮雪

萬里江天萬里
心、飄々花絮灑
平林、橋橫路斷
馬蹄滑、更
說一閔搏不禁、

平沙落雁

點々隨群舊
處栖、蓼花蘆葉
暗長堤、天寒
水冷難成宿、猶
自依々怨別離、

(新撰朗詠抜書)

(鶯)

金殿夢驚 傳好語

玉樓鐘動 奏清音 (小野後生)

花のかをかせの たよりにたぐへてぞ
うぐひすさそふ しるべにはやる (紀友則)

(柳)

白雪花繁 空撲地
緑絲枝弱 不勝鶯 (白居易)

あさみどり染(織)て みだるゝあをやぎの
いとをもはるの かぜやよるらん (坂上是則)

(花)

粧繁鳥囀 家園露
香亂馬嘶 隴塞風 (源成宗)

はるきてぞ人も とひける山ざとは
花こそやどの あるじなりけれ (藤原公任)

(花橘)

珠顆形容 随日長
瓊漿氣味 得霜成 (白居易)

さつきやみ空 なつ かしくにほふかな
花たちばなの 風やふくらん (相模)

(郭公)

四五月交 雲外語
二三更後 雨中音 (藤原公任)

みやま出てよはにや きつるほとゝぎす
あかつきかけて 声のきこゆる (平兼盛)

(月)

銀漢無雲 羅明曉
爐峯有雪 草堂秋 (大江隆兼)

ひとりみて月を ながむるあきの よは
何ことをかは おもひのこさむ (具平親王)

(紅葉)

山雲秋後 隔霜觸
野客朝来 穿錦斟 (後三条院御製)

いかなればおなじ しぐれにもみぢ する
はゝそのもりの うすくこからん (藤原頼宗)

(菊)

菊足孤叢 臣数代
戴霜共立 玉欄前 (藤原定頼清慎公)

あさまだき八重咲 きくのこゝのへに
みゆるはしもの をけるなりけり (藤原長房)

(冬夜)

夜冬漸識 千山雪
曉硯初諳 四海寒 (橘在列)

しもをかぬ袖だに さゆる冬のよは
かものうはげを おもひこそやれ (藤原公任)

(雪)

秦客訪花 驚出洞
庾公看月 誤登樓 (何玄)

まつ人のいまも きたらばいかゞせむ
ふまゝくおしき 庭のゆきかな (和泉式部)

(酒)

人喜樽中 春氣湛
鳥思盃底 晚香分 (藤原篤茂)

めづらしきひかり さしそふさか づきは
もちながらこそ 千世もめぐらめ (紫式部)

(仙家)

開雲種玉 嫌山浅
渡海傳書 怪鶴遲 (盧倫)

故郷はみしことも あらずをのゝえの
くちしところぞ こひしかりける (紀友則)

(祝)

流下縁邊 皆上壽
東籬日月 不似西 (大江以言)

君が代はあまの はごろもまれに 来て
なつともつきぬ いはをならな卒 (よみ人しらす)

11 和漢朗詠集抜書

(風)

班姬裁扇 応誇尚 列子懸車 不往還 (保胤)
あきかぜのふくに つけてもとはぬ かな
おぎの葉はらば おとはしてまし (中務)

(雲)

尽日望雲 心不繫 有時見月 夜方閑 (幽栖元樞)
よそののみゝて やゝみなむかつら ぎや
たかまの山の 嶺のしらくも

(晴)

煙消門外 青山近 露重窓前 緑竹低 (鄭師冉)
霞はれみどりの そらものどけて
あるかなきかに 遊ふいとゆふ

(暁)

五声宮漏 初明後 一点窓燈 欲滅時 (白)
暁のなからまし かばしらつゆの
おきてわびしき 別せましや

(松)

青山有雪 諳松性 碧落無雲 称鶴心 (許渾)
常盤なるまつの みどりも春くれ ば
いまひとしほの 色まさりけり (源宗干)

(竹)

晋騎兵参軍 王子猷裁称 此君
唐太子賓客 白楽天愛為 吾友
しぐれするをとは すれどもくれ竹の
などよとゝもに いろもかはらぬ (草)

(草)

沙頭雨染 斑々草 水面風駆 瑟瑟波 (白)
やかずともくさは もえなむかすが のを
たゝ春の日に まかせたらなん

(鶴)

鶴帰旧里丁 令威之詞 可聴 龍迎新儀陶
安公之駕 在眼 (神仙策文 都)

(神)

わかのうらにしほみち くればかたをなみ
あしべをさして たづ啼渡る

12 白楽天尚齒會

唐九老詩并序

白居易 白居易
会昌五年三月二十
四日、胡・吉・劉・鄭・盧・張
等六賢、皆多年寿、
予亦次焉、於東都敞
居履道坊尚齒
之會、七老相顧、既
醉且飲、静而思之、
此會希有、因各賦七
言韻詩、一章以記之、
或傳詩(諸)好事者、
其年夏又有二老、
年貌絶倫同歸
故郷、亦來斯會、続

命貫姓名年齒、寫其形貌、附于圖右、仍以一絕贈之云、

雪作鬚眉荷作衣、遼東華表暮雙

歸、當時一鶴尤希有、何況今逢

兩令威、

會中遺老李元爽年一百三十六、禪僧如滿歸洛年九十五、

前懷州司馬安定胡杲、年八十九

閑居同会在三春、大抵愚年最出群、

霜鬢不嫌盃酒興、白頭仍愛玉爐熏、

徘徊玩柳心尤健、老大看花意却勤、鑿

落落對探醅、香囊高掛任氤

氲、搜神得句題紅紙、望景長吟對白

雲、今日交情何不替、

齊年同事聖明君、

衛尉卿致仕馮翊吉

皎、年八十八、

休官罷任已閑居、林苑園亭興有

餘、對酒最宜花藻發、邀歡不厭柳条

初、低腰醉舞垂緋袖、擊筋謳歌

任竭裾、寧用管弦來合雜、自親松竹

且清虛、飛觥酒到須先酌、賦韻詩成

不任書、借問商山賢四皓、不知此後更

何如、

前磁州刺史廣平劉眞、年八十七、

垂絲今日幸同筵、朱紫居身是大年、

賞景當知心未退、吟酒猶覺力完全、

閑庭飲酒當三月、

在席權豪象七賢、山茗煮時秋霧碧、

玉盃斟處彩霞鮮、臨塔花咲如

歌妓、傍竹松聲當管絃、雖未學窮

生死訣、人間豈不是神仙、

前龍武軍長史榮陽鄭據、年八十五、

東閣幽閑日暮春、邀惟皆是白頭賓、

官班朱紫多相似、年紀高低次第勻、聯句

每言松竹意、停盃多說古今人、更

無外事來心肺、空有清虛入鬼神、醉

舞兩迴迎勸酒、狂歌一曲會餘身、

今朝何事偏情重、同作明時列任

臣、

前侍御史內供奉官范陽盧眞、年八十二、

三春已盡洛陽宮、天氣初晴景象中、

千朵嫩桃迎曉日、萬株垂柳逐和風、

非論官位皆相似、及至年高已共同、對

酒歌聲猶覺妙、玩花詩思可能窮、

先時共作三朝貴、今日猶逢七老翁、但把

綠醕常滿酌、煙霞萬里會應通、

前永州刺史清河張渾、年七十七、

幽亭春盡共為慳、印綬居身是大官、

遁跡豈勞登遠岫、垂絲何必坐溪

磻、詩聯六韻尤應易、酒飲三盃未覺

難、每況襟惟同宴會、共將心事比

波瀾、風吹野柳懸羅帶、日照

庭花落綺紈、此席不煩鋪錦帳、斯筵堪作畫圖看、

刑部尚書致仕白居易、年七十四、

七人五百八十四、拖紫紵朱垂白鬚、囊

裏無金莫嗟嘆、樽中有酒且

飲、吟成六韻神還旺、飲到三盃氣

尚粗、嵬峨狂歌教婢拍、婆娑醉舞

遺孫扶、天年高邁二疎傳、人數多於四

皓圖、除却三山五天竺、人間此會應無、

睢陽五老圖詩并圖

錢明逸

夫蹈榮名而保終吉、都貴勢而躋遐

考白首一節人生、所難、今致政官師

相國杜公、雅度敏識圭璋巖廟、清德

令望龜准當世、功成自引得謝君門、

視所難得者則安享之、謂所難行

者則恬居之、燕早睢陽與賓客太原

王公、故衛尉河東畢卿、兵部沛國

朱公、駕部始平馮公、咸以耆年掛冠、優

遊鄉梓、暇日宴集為五老會、賦詩酬唱

怡然相得、宋人形于繪事以紀其盛、

昔唐白樂天居洛陽、為九老會于今圖識相

傳、以為勝事、距茲數百載無能紹者、以今

況昔、則休烈鉅美過之、明逸遊公之門

13

9

5

3

6

7

4

2

10

11

8

12

3

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

久矣、以鄉閭世契、倍厚常品、今假手留輪、日登翹館、因得圖像、占述序引、以代鄉校詠謠之萬一、至和丙申中秋日、錢明逸序、

14

太子太師致仕祁國公杜衍、八十歲、五人四百有餘歲、俱稱分曹與掛冠、天地至仁難補報、林泉幽致許盤桓、雪鬢霜鬢蒲坐寒客、若也睢陽為故事、何妨列向畫圖看、

禮部侍郎致仕

王渙、九十歲、

15

分曹歸政養耆年、李下何由更王冠、賢相賦詩同嘯傲、聖君優詔去盤桓、龐眉老叟俱稱壽、凌雪喬松豈畏寒、屈指五人齊五福、鄉人須作二疏看、

司農卿致仕畢世長、九十四歲、

非才最忝預高年、分務由來近掛冠、

16

敢造鉅賢論軌躅、幸依都府得盤桓、篇章棒和慙風雅、眷待優隆荷歲寒、儻許衰容參盛列、願憑繪事永傳看、

兵部郎中致仕

朱賁、八十八歲、

各還朝政遇堯年、鶴髮俱宜頂道冠、

17

乍到林泉能放曠、全拋簪紱尚盤桓、君恩至重如天覆、相坐時親畏地寒、

九老且無元老貴、莫將西雄一般看、

駕部郎中致仕

馮平、八十七歲、

詔恩分務許優閑、肯借留都躡多冠、

名宦儻來空擾攘、丘園歸去好

盤桓、醉遊春圃煙霞暖、吟聽秋潭水石寒、

退傅況兼為隱伴、紅塵那復舉頭看、

18

(余白)

19

13 西東兩都賦

西都賦

有西都賓、問於東都主人曰、蓋聞皇漢之初經營也、嘗有意乎都河洛矣、輟而弗康、寔用西遷、

作我上都、主人聞其故、而觀其制乎、

主人曰、未也、願竇摠懷舊之蓄念、發思古之幽情、博我以皇道、弘我以漢京、賓曰、

唯々、漢之西都在於雍州、寔曰長安、左據函谷二嶠之阻、表以太華終南之山、右界褒斜隴首之險、帶以洪河涇渭之川、衆流之隈、汗流其西、華實之毛、則九州之上腴焉、防禦之阻、則天地之隕區焉、是故橫被六合、三成帝畿、周以龍興、

秦以虎視、及至大漢受命而都之也、仰悟東井之精、俯協河圖之靈、奉春建策、留侯演成、天人合應、以發皇明、乃

眷西顧、寔惟作京、乃

於是瞻秦嶺、瞰北阜、扶禮瀾、據龍首

圖皇基於億載、度宏規而大起、肇自高麗、歷十二之延祚、故窮泰而極侈、建金城之萬雉、呀條池而成淵、披三條之廣路、立十二之通門、內則街衢洞達、閭閻且千、九市開場、貨別隧別、人不得顧、車不得旋、闔城溢郭、旁流百塵、紅塵四合、煙雲相連、於是既庶且富、娛樂無疆、都人士女、殊異乎五方、遊士擬於公侯、列肆侈於姬姜、鄉曲豪舉、遊俠之雄、節慕原嘗、名垂春陵、連交合衆、騁鷲乎其中、若乃

觀其四郊、浮遊近縣、則南望杜霸、北眺五陵、名都對郭、

邑居相對、英俊之域、絳冕所興、冠蓋如雲、七相五公、興乎州郡之豪傑、五都之貨殖、三選七遷、充奉陵邑、蓋以疆幹

(中略)

厲復穴失木、豺狼備鼠、爾乃移師趨險、竝蹈潛穢、窮虎奔突、

狂兕觸蹶、許少施巧、秦成力折、掎僂狡、拒猛噬、脫角挫脰、徒搏獨殺、挾師豹、拖熊螭、曳犀羆、頓象熊、

超洞壑、越峻崖、蹶崩澗、巨石頹、松柏仆、叢林摧、草木無餘、禽獸殄夷、於是天子登屬玉之館、歷長楊之榭、覽

於此

於是

舊墟聞之乎故老，十分未得其一端，故不能偏舉也
(余白)
30

東都賦
東都主人，喟然而嘆曰：痛乎風俗之移人也，子實秦人，矜夸館室，保界河山，信識昭襄而知始皇矣，烏觀大漢之云為乎，夫大漢之開元也，奮布衣以登皇位，由數筭而創萬代，蓋六籍所不能談，前聖靡得而言焉。當此之時，功有橫而當天，討有逆而順民，故婁敬度勢而獻其說，蕭公權宜而拓其制，時豈泰而安之哉，計不得以上也，吾子曾不是睹，顧曜後嗣之未造，不亦暗乎，今將語子以建武之治，永平之事，監于太清，以變子之惑志，往昔王莽作逆，漢祚中缺，天人致誅，六合相滅，于時之亂，生民幾亡，鬼神泯絕，壑無完樞，郭罔遺室，原野厭人之肉，川谷流人之血，秦項之災，猶不克半，書契以來，未之或紀，故下人號而上訴，上帝懷而降監，乃致命乎聖皇，於是聖皇乃握乾符，闡坤珍，披皇圖，稽帝文，赫然發憤，應若興雲，靈擊混陽，憑怒雷震，遂超大河，跨北岡，立號高邑，建都河洛，紹百王荒屯，因造化之盪滌，體元立制，繼天而作，承唐統，接漢緒，茂育群

生、恢復疆宇，動兼乎在昔，事勲乎三五，豈特方軌竝跡紛綸，后辟，治近古之所務，蹈一聖之險易云爾，日夫建武之元，天地革命，四海之內，更造夫婦，肇有
(中略)
斯詩，義正乎楊雄，事實乎相如，匪唯主人之好學，蓋乃遭遇乎期時，小子狂簡不知所裁，既聞正道，請終身而誦之，其辭曰：
明堂詩
於昭明堂，々々孔陽，聖皇宗祀，穆々煌々，上帝宴饗，五
位時序，誰其配之，世祖光武，普天率土，各以其職，猗歟緝熙，允懷多福，
辟雍詩
乃流辟雍々々湯々，聖皇莅止，造舟為梁，幡々國老，乃父乃兄，抑々威儀，孝友光明，於赫太上，示我漢行，洪化惟神，永觀厥成，
靈臺詩
乃經靈臺，々々既崇，帝勤時登，爰考休徵，三光宣精，五行布序，習々祥風，祁々甘雨，百穀蓂々，庶草蕃廡，屢惟豐年，於皇樂胥，
寶鼎詩
嶽修身貞兮川効珍，叶金景兮彌浮雲，寶鼎見兮色紛緇，煥其炳兮被龍文，登祖廟兮享聖神，昭靈德兮彌億年

白雉詩
啓靈篇兮披瑞圖，獲白雉得兮効素鳥，嘉祥皇兮集皇(都)，發皓羽兮奮翹英，容繁朗兮於純精，彰皇德兮侔周成，永延長兮膺天慶，
(余白)
26

14 古文孝經

(表紙)
古文孝經
(本文)

古文孝經序
孔安國

孝經者何也，孝者人之高行，經常也，自有天地人民以來，而孝道著矣，上有明王，則大化傍流，充塞六合，若其無也，則斯道滅息，當吾先君孔子之世，周失其柄，諸侯力爭，道德既隱，禮誼又廢，至乃臣弑其君，子弑其父，亂逆無紀，莫之能正，是以夫子每於閑居，而歎述古之孝道也，夫子、敷先王之教於魯之洙泗，門徒三千人，達者七十有二也，貫首弟子，顏回、閔子騫、冉伯牛、仲弓性也，至孝之自然，皆不待論而寤者也，其餘則排憤憤，若存若亡，唯曾參躬行匹夫之孝，而未達天子諸侯以下，揚名顯親之事，因侍坐，而諮問焉，故夫子告其議，於是曾子喟然知孝之為大也，遂集而錄之，名曰孝經，與五經並行於世，逮乎六國，學校衰廢，及秦始皇焚書坑儒，孝經由是不傳也，至漢興，建元之初，河間王得而獻之，凡十八章，文字多誤，博士頗以教授，後魯恭王使人壞夫子講堂，於壁中石函，得古文孝經

二十二章，載在竹牒，其長尺有二寸，字科斗形，魯三老、孔子惠、抱詣京師，獻天子，天子使金馬門待詔學士、與博士群儒，從隸字寫之，還子惠一通，以一通賜所幸侍中霍光，光甚好之，言為口實，時王公貴人，咸神祕焉，比於禁方，天下競欲求學，莫能得者，每使者至魯，輒以錢帛，用相問遺，魯更有至帝都者，無不齋持，以為行路之資，故古文孝經，初出於孔氏，而今文十八篇，諸儒各任意巧說，分為數家之誼，淺學者，以當六經，其大車，載不勝，反云孔氏無古文孝經，欲矇時人，度其為說，誣亦甚矣，吾愍其為如此，發憤精思，為之訓傳，悉載本文，萬有餘言，朱以發經，墨以起傳，庶後學者，觀正誼之有在也，今、中秘書，皆以魯三老所獻古文為正，河間王所上，雖多誤，然以先出之故，諸國往往有之，漢先帝發詔，稱其辭者，皆言傳曰，其實今文孝經也，昔吾逮從伏生論古文尚書誼，時學士會，云出叔孫氏之門，自謂知孝經有師法，其說移風易俗，莫善於樂，謂為天子用樂，省萬邦之風，以知其盛衰，衰則移之，以貞盛之教，淫則移之，以貞固之風，皆以樂聲知之，如則移之，故云移風易俗，莫善於樂也，又，師曠云，吾驟歌南風，多死聲，楚必無功，即其類也，且曰，庶民之愚，安能識音，而可以樂移之乎，當時，眾人僉以為善，吾嫌其說迂，然無以難之，子游為武城宰，作絃歌以化民，武城下邑，而猶化之以樂，故傳曰，夫樂以關山川之風，以曜德於廣遠，風德以廣之，

風物以聽之、修詩以詠之、修禮以節之、又曰、用之邦國焉、用之鄉人焉、此非唯天子用意樂明矣、夫雲集而龍興、虎嘯而風起、物之相感、有自然者、不可謂母也、胡笳吟動、馬嘶而悲、黃老之彈、嬰兒起舞、庶民之愚、愈於胡馬與嬰兒也、何爲不可以樂化之、經又云、敬其父則子悅、敬其君則臣悅、而說者以爲、各自敬其爲君父之道、臣子之悅也、余謂不然、君雖不君、臣不可以不臣、父雖不父、子不可以不子、若君父不敬其爲君父之道、則臣子便可爲忿之耶、此說不通矣、吾爲傳、皆弗之從焉也、
(余白)

古文孝經
開宗名義章第一
仲尼問居、曾子侍坐、子曰、參、先王有至德要道、以訓天下、民用和睦、上下亡怨、女知之乎、曾子避席曰、參弗敏、何足以知之乎、子曰、夫孝德之本也、教之所繇生也、復坐、吾語女、身體髮膚受于父母、不敢毀傷、孝之始也、立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也、夫孝始於事親、中於事君、終於立身、大雅云、亡念爾祖、聿修其德、
天子章第二
子曰、愛親者、不敢惡於人、敬親者、不敢慢於人、愛敬盡於事親、然後德教加於百姓、刑於四海、蓋天子之孝也、呂刑云、一人有慶、兆民賴之、
諸侯章第三
子曰、居上不驕、高而不危、制節謹度、滿而不溢、高而不危、所以長守貴也、滿而不溢、所以長守富也、富貴不離其身、然後能保其社稷、而和其民人、蓋諸侯之

孝也、詩云、戰戰兢兢、如臨如深淵、如履薄冰、
卿大夫章第四
子曰、非先王之法服不敢服、非先王之法言弗敢言、非先王之德行不敢行、是故、非法不言、非道不行、口無擇言、身無擇行、言滿天下亡口過、行滿天下亡怨惡、三者備矣然後能保其祿位而守其宗廟、蓋御大夫之孝也、詩云、夙夜匪懈以事一人、
士章第五
子曰、資於事父以事母、其愛同、資於事父以事君、其敬同、故母取其愛、而君取其敬、兼之者父也、故以孝事君則忠、以弟事長則順、忠順不失、以事其上、然後能保其爵祿、而守其祭祀、蓋士之孝也、詩云、夙夜寐、忝爾所生、
庶人章第六
子曰、因天時就地之利、謹身節用、以養父母、此庶人之孝也、
孝平章第七
子曰、故自天子以下至于庶人、孝亡終始、而患不及者、未之有也、
三才章第八
曾子曰、甚哉、孝之大也、子曰、夫孝天之經也、子之誼也、民之行也、天地之經、而民是則之、則天之明、因地

庸愚皆識其端、明陰洞陽、賢哲罕窮其數、然而天地苞乎陰陽、而易識者、以其有象也、陰陽處乎天地、而難窮者、以其無形也、故知、象顯可徵、雖愚不惑、形潛莫覩、在智猶迷、況乎佛道崇虛、乘幽控寂、弘濟萬品、典御十方、舉威靈而無上、抑

未足比其清華、仙露明珠、詎能方其朗潤、故以智通無累、神測未形、超六塵而迺出、隻千古而無對、凝心內境、悲正法之陵遲、栖慮玄門、慨深文之訛謬、思欲分條析理、廣(尾欠)
(余白)

16 歐陽詢書皇甫君碑
(表紙)
歐陽詢書皇甫君碑
(本文)
隨柱國左光祿大夫弘義明公皇甫君之銀青光祿大夫太子左庶子上柱國黎陽縣開國公于志寧製、
夫素秋肅殺、勁草於疾風、叔世艱虞、忠臣赴難、銜須授命、結纓殉國、英聲煥乎記牒、徽烈著於旂常、豈若疊起蕭牆、禍生蕃翰、強論七國、勢重三監、其有蹈水火而不辭、臨鋒刃而莫顧、激清風於、抗節於當時者、見之弘義名明矣、君諱誕、字玄憲、安定朝那人也、昔立效長丘、樹績東郡、太尉裂壤於槐里、司徒昨土於彤門、是以車服旌其器能、勲德銘功衛鼎、騰美晉鐘、盛族冠於國高、華宗邁於藥部、在史牒、可略言焉、曾祖重華、使持節、驍將軍、梁州刺史、潤木暉山、方重價於趙璧、奇采於隨祖和雍州贊治、贈使持節、散騎常侍、車騎大將軍、儀同三司、膠涇二州刺史、高衢、追風之足、扶搖始搏、早墜垂天之羽、父使持騎大將軍、開府

儀同三司會隨州刺史、長樂恭侯、橫劍柱恆威重冠軍、折瑞蕃條、聲高勃海、包申伯、稟嵩山之秀氣、材蕭相、降昂緯之淑精、據德依仁、貞體道含章表質、詎待變於朱藍、恭孝為基、寧取訓於橋梓、鋒剽犀象、百練挺於昆吾、翼掩鴻、九萬奮於溟海、博韜產、文瞻卿雲、孝窮溫清之方、忠救之道、同何充之器局、被重晉君、類荀攸之宏圖、見知魏主、斯故包羅衆藝、囊括群英者也、起家除周畢王府長史、策名蕃牧、則位重首寮、絃服睢陽、則譽客、既而蒼精委馭、炎運啓圖、作貳遣服、寔資令望、授廣州長史、悅近來遠、變輕詔於於離題、伐叛懷柔、漸淳化於緩耳、蜀主地處維城、寄深磐石、建玉壘、作銅梁、妙擇奇材、以為僚益州控管府司法、昔梁孝開國、首辟鄒陽、燕昭建邦、肇徵郭隗、故得馳令問於碣館、播芳猷於平臺、以古方今、彼此一也、尋尚書比部侍郎、轉刑部侍郎、趨步紫庭、光映朝列、折旋丹地、譽重周行、俄遷治書侍御史、彈違系憲、時絕權豪、霜蘭直繩、俗寢貧競、隨文帝求衣待旦、志在刑呢、納泣辜、情存緩獄、授大理少卿、公巨細必察、同張季之聽理、寬猛相濟、比于公之無冤、但禮關務殷、樞轄寄重、允膺此職、寔難其人、授尚書右丞、洞明術、深曉治方、藏否自分、條目成理、丁母憂去職、哀慟里閭、隣人為之罷社、悲感衢路、行客以之輟歌、孝德則師範彝倫、精誠則貫徹幽

顯、高之至性、何加焉、尋詔奪情、復其舊、于時山東之地、俗阜民澆、雖預編民、未行警教、詔公持節、為河北河南道安撫大使、仍賜米五百石絹五匹、公輶軒布政、美華之篇、擁節觀風、榮甚繡之使、事訖反命、授尚書左丞、然并州地處參墟、城臨晉水、作固同於西蜀、設險類於東秦、寔山河之要衝、信蕃服之襟帶、授州控管府司馬、加儀同三司、公贊務大邦、聲名藉甚、精民感、黠吏畏威、屬文帝劍璽空留、鑾蹕莫反、楊諒率太原(後略)

17 徐浩書不空三藏碑 (表紙)
徐浩書不空三藏碑 (本文)

唐大興寺故大德、大辯正廣智三藏和尚碑銘并序、銀青光祿大夫、御史大夫、上柱國馮國縣開國公嚴鄂撰、銀青光祿大夫、彭王傅上柱國會稽開國公徐浩書、和尚不空、西域人也、氏族不聞、於中夏故不書、玄宗知至道特見高印訖、肅宗代三朝皆為灌頂、國師以玄言德祥開右至、初以特進大鴻臚褒表之、及示疾不起、又就臥內加開府儀三司、肅國公皆牢讓不允特

錫、法号曰大廣智三藏、大曆夏六月癸未、滅度於京師大興善寺、代宗為廢朝三日、贈司空、追謚大辯正廣智三藏和尚、茶毘之時、追中謁者齋祝文祖祭申如在之、敬睿詞切嘉薦令芳禮冠、群倫舉無與比、伊年九月以舍利起塔於舊居寺院、和尚性聰朗博貫、前佛萬法、要指繇門、獨立遼盪盪、其無雙、稽夫、眞言字義之憲度、灌頂升壇之軌迹、則時成佛之速、應聲儲祉之妙、天麗且彌地普而深固、非末學所能詳也、敢以概見序其大、昔金剛薩埵親於毘盧遮那佛、前受瑜伽取上乘義、後數百歲傳於龍猛菩薩、龍猛又數百歲於龍智阿闍梨、龍智傳金剛智阿闍梨、金剛智東來傳於和尚、和尚又西遊、天竺師子等國詣龍智阿闍梨揚擢十八會法、化相承、自毘盧遮那如來地、於和尚凡六葉矣、每齋戒留中道、迎善氣登禮、皆答福應較然、温樹下言莫可記、已西域隘巷、象奔突、以慈眼視之、不旋踵而象伏、不起、南海半渡天吳鼓駭、以定力對之、未移晷而海靜無浪其生也、母氏有

毫光照燭之瑞、其效也、精舍有池水竭涸之異、凡僧夏五十享年、自成一童至于晚暮、常飾其具坐道場、浴蘭焚香、入佛知見、五十餘年、夜寒暑、未曾須臾有傾搖懈倦之色、過人絕遠乃如是者、後學升堂誦說有法者非一、而沙門惠朗受、次補之記傳燈之、繼明佛日紹六為七至矣哉、於戲法子永懷梁木將紀本行託餘、勒崇昔承微言、今見几杖、光容眇漠壇宇清槍、誓書昭銘、子何攘銘曰、嗚呼大士、右我三宗道為帝師、秩為儀同、昔在廣成軒順風歲逾三千、復有肅公瑜伽上乘眞語密契六葉授受傳統相繼述者牒之爛然、有第陸伏狂鷄水息、天吳慈心制暴慧降、愚寂然感通其加測乎、兩楹夢奠、雙樹變色、司空龍終、辯正旌德、天使祖祭宸衷、悽惻詔、起寶塔舊隅、下藏舍利、上飾浮屠跡、殊石為偈、傳之大部、建中二年歲次辛酉十一月乙十五日己巳建

出品目録

前期…7月7日(土)～8月5日(日)
後期…8月11日(土)～9月9日(日)

展示番号	作品名	員数	展示期間
〈家熙の書〉			
仮名書(含散らし書)			
1	二十一代集巻頭和歌	一卷	全
2	中古三十六人歌合	一帖	全
3	新六歌仙并古歌	一卷	前
4	新六歌仙	一帖	全
5	十二ヶ月花鳥和歌	一卷	全
6	子日行幸奉和歌序并庚申夜奉和歌序	一卷	全
7	近江八景和歌	一卷	前
8	南都八景和歌	一卷	後
9	瀟湘八景和歌・十躰和歌	一卷	後
漢字(行書・草書)			
10	予楽院撰政筆詩歌	一卷	前
11	和漢朗詠集抜書	一卷	後
12	白樂天尚齒会詩	一卷	全
13	西東両都賦	二卷	全

漢字(楷書)

14	古文孝経	一帖	前
15	褚遂良書聖教序	一卷	後
16	歐陽詢書皇甫君碑	一帖	前
17	徐浩書不空三藏碑	一帖	後

〈家熙の好み〉

名品の仕立て

18	「玉泉帖」付属品	家熙翻刻文、卷子表紙、内箱	三点	前
19	「粘葉本和漢朗詠集」付属品	基熙書状、漆箱、袋	三点	前
20	「七徳舞」付属品	帖表紙、漆箱、袋	三点	後

名品の表装

21	「平重盛書状」表装		一幅	前
22	「帥大納言経信卿消息」表装		一幅	前
23	「貫之集断簡」表装		一幅	後
24	「藤原為家書状」表装		一幅	後

お抱え絵師

25	四季図屏風	渡辺始興筆	六曲一双	全
----	-------	-------	------	---

謝 辞

本展覧会を開催するにあたり、陽明文庫の名和修氏には、格別の御配慮をいただきました。また、杉本まゆ子・住吉朋彦・長沢孝三・四辻秀紀・鈴木真弓・松村和歌子各氏には、出典調査等で御教示をいただきました。深謝いたします。

近衛家熙 ― 風雅の探究

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 25

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十三年七月七日発行

© 2001, Museum of the Imperial Collections

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

近衛家熙 ― 風雅の探究

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 25

編集 宮内庁三の丸尚蔵館
制作 株式会社 東京美術
翻訳 横溝廣子
発行 宮内庁
平成十三年七月七日発行

©2001, Museum of the Imperial Collections

List of Exhibits

<Calligraphy by Iehiro>

Kana (Japanese syllabary), including *chirashigaki* (scattered characters)

1.
The first *waka* poem of anthologies selected by the Emperor and Ex-emperors over 21 generations
33.0 × 1073.0

2.
Poetry contest by 36 people
36.8 × 52.4

3.
Poems by the Shin-rokkasen (6 famous poets of the early Kamakura period) and 10 other old poems of the same era
31.5 × 299.4

4.
Poems by the Shin-rokkasen (6 famous poets of the early Kamakura period)
40.0 × 50.8

5.
Poems on flowers and birds of the 12 months, by Fujiwara Sadaie
33.2 × 640.8

6.
Foreword of *waka* poems written on the occasion of the Nenōhi-gyōkō and the Kōjin night
29.3 × 1291.9

7.
Waka poems about the Oumi-hakkei (8 famous landscapes in Oumi, Shiga Prefecture)
34.0 × 320.2

8.
Waka poems about the Nanto-hakkei (8 famous landscapes in Nara Prefecture)
33.0 × 313.2

9.
Waka poems about the Shōshō-hakkei (8 famous landscapes in China) and ten poems showing examples of *waka* form, by Fujiwara Sadaie
32.8 × 948.0

Kanji (cursive style characters)

10.
Various poems copied by Iehiro
34.4 × 1470.0

11.
Poems selected from Wakan-Rōeishū
31.6 × 495.0

12.
Poems created on the occasions of Pai Lotien's celebrations of old age
29.2 × 906.0

13.
Poems about the west and east Chinese cities, Changan and Luoyang
27.4 × 1138.0
27.4 × 1134.0

Kanji (square style characters)

14.
Filial Duty Morals preached by Confucius written in ancient characters
28.8 × 16.6

15.
Foreword by Taisong of the Tang Dyanasty, to the Chinese translation of Buddhist sutras brought from India and translated by Hsuan-tsung
29.2 × 355.7

16.
Epigraph of Huangfujun, vassal of the Sui Dynasty written by Ouyangxun
32.0 × 18.2

17.
Epigraph of Indian priest Bukong written by Xuhao
32.4 × 20.2

<Iehiro's Tastes>

Outfits of Masterpieces

18.
Attached articles to Gyokusenjō (Reproduction by Iehiro, cover page, box)

19.
Attached articles of Detchōbon Wakan Rōeishū (Letter by Motohiro, lacquer box, bag)

20.
Attached articles of Shichitoku-no-mai (Cover page, lacquer box, bag)

Mounts of Masterpieces

21.
Letter by Taira-no Shigemori
125.5 × 65.5

22.
Letter by Minamoto-no Tsunenobu
122.5 × 52.9

23.
Segment of Collected Letters by Ki-no Tsurayuki
119.0 × 55.8

24.
Letter by Fujiwara-no Tameie
118.0 × 53.7

Painter serving Iehiro

25.
Screen painting of the Four Seasons by Watanabe Shikō
191.5 × 397.6

Foreword

Konoe Iehiro (1667-1736) was a man of culture who acted in important posts within the Imperial Court from the end of the 17th century to the beginning of the 18th century, such as the regent of Emperor Nakamikado. It was a period when the court culture was gradually declining while respecting tradition. Iehiro was the 21st head of the Konoe family, the top of the five regent families, which started with Fujiwara-no Kamatari, and is represented by Fujiwara Michinaga, who was at the height of prosperity during the Heian period. The head of the Konoe family was successively the top of the official posts within the court, and the leader at court conferences. The result of their positive activity towards art and literature throughout history are among the 200,000 pieces of cultural property such as old records and books passed down within the Konoe family, which are stored within the Yōmei Bunko library.

Within this environment, Iehiro showed superior talent in calligraphy and painting at an early age, was erudite favoring studies, and well versed in the arts of tea, flower arranging, and incense, making him the leading person among court culture. Our collection includes pieces of Iehiro's outstanding calligraphy. *Waka* (31 syllable Japanese poems) and *kanseki* (classical Chinese books) are elegantly written in *kana* (Japanese syllabary), *sōsho* (cursive style characters), and *kaisho* (square style characters) with his unique style having studied the *Jōdaiyō* (old style). Furthermore, Iehiro's note of authentication on the boxes and beautiful mountings among the old calligraphy masterworks that were presented to the Imperial family by the Konoe family in 1878, show his attitude in collecting such objects. Also, the screen painting by the painter serving Iehiro, Watanabe Shikō (1683-1755), is also exhibited, showing Iehiro's deep interest in paintings.

Iehiro's relics have a calm beauty and a dignified refinement. Whether calligraphy or painting, the elegance he relished continuously contained his spirit of inquiry.

In this exhibition, we shall introduce a part of Iehiro's cultural activity and reconsider its importance.

(Translated by Hiroko Yokomizo)



Konoe Iehiro

— A Pursuit of Elegance —

Museum of the Imperial Collections
Sannomaru Shōzōkan